

# 瀉仰宗の盛衰 (二)

石井修道

〔今回のまえがき〕前号の「二 仰山慧寂」の項目に、『景德伝燈録』の仰山慧寂の關係の(58)～(95)の資料を加え、すべての仰山慧寂の項目に注を付したものが、今回の論文である。注の番号の場所を判りやすくするために、前号の仰山慧寂の項目の目次を再びかかげ、その項目に付した注の番号をその下に加えて一応の参考としたい。その後の目次にも、今回の論文に『景德伝燈録』より加えた(58)～(95)の項目名とその注に付した番号を加えた。本来は、注の内容は、語句解釈や公案解釈をすべきと思われるが、量も多く、前述したごとく、ここでは資料整理を中心としたから、それに即した注を付しておきたい。

## 目次

### 一 はじめに

### 二 仰山慧寂

|                    | 注の番号      |                  |           |
|--------------------|-----------|------------------|-----------|
| (1) 陸希声撰「仰山通智大師塔銘」 | (1)～(19)  | (7) 俗官との拈拄杖の話    | (46)～(47) |
| (2) 唐袁州仰山慧寂伝       | (20)～(29) | (8) 善惡を思わざる時     | (48)      |
| (3) 仰山慧寂の行状        | (30)～(37) | (9) 耽源下で納衣を洗う    | (49)      |
| (4) うちは雜貨屋         | (38)～(40) | (10) 景岑との這个の事の問答 | (50)～(51) |
| (5) 法身は説法できるか      | (41)～(44) | (11) 東平山での看經     | (52)      |
| (6) 教外の眼           | (45)      | (12) 韋宙との看読問答    | (53)      |
|                    |           | (13) 韋宙へ与えた円相中の偈 | (54)      |
|                    |           | (14) 鏃を齧む話       | (55)～(60) |
|                    |           | (15) 双峰との当情問答    | (61)～(62) |
|                    |           | (16) 円相中の水の字     | (63)      |

|      |               |             |
|------|---------------|-------------|
| (17) | 円相中の仏の字       | (64)        |
| (18) | 仏に唾した行者の話     | (65)        |
| (19) | 鐘を贖う俗官の話      | (66)        |
| (20) | 慧寂の為人は大変早い    | (67)        |
| (21) | 色を見れば心を見る     | (68)        |
| (22) | 滹仰父子の雪問答      | (69)        |
| (23) | 洞山との是非の問答     | (70)        |
| (24) | 宗和尚下の念経       | (70)の(2)    |
| (25) | 滹山のための斎       | (71)        |
| (26) | わたしは信を立てない    | (72)        |
| (27) | 耽源下での唱札問答     | (73)        |
| (28) | 韋宙との六祖伝の問答    | (74)の(75)   |
| (29) | 道存との問答——その(一) | (76)の(86)   |
| (30) | 道存との問答——その(二) | (87)の(89)   |
| (31) | 思邈との頓悟入理の問答   | (90)の(92)   |
| (32) | 亭育との禅決の問答     | (93)        |
| (33) | 示寂後の記事        | (94)の(95)   |
| (34) | 慧忠国師の馬祖禅批判    | (96)の(98)   |
| (35) | 石室善道の仏法を探る    | (99)の(100)  |
| (36) | 石室と仰山の月見      | (101)の(103) |
| (37) | 過去の諸聖はどこへ逝く   | (104)の(106) |
| (38) | 仰山の『華嚴経』の話    | (107)の(111) |

|      |                 |             |
|------|-----------------|-------------|
| (39) | 仰山の一劃の意味        | (112)の(114) |
| (40) | 仰山と岑大虫との話の長慶の批評 | (115)の(117) |
| (41) | 禾山無殷の悪発         | (118)の(122) |
| (42) | 仰山の鋏と玄沙の鋏の話     | (123)の(125) |
| (43) | 仰山、東寺如会に二度参ず    | (126)       |
| (44) | 滹山の「大用を得ず」の仰山評  | (127)       |
| (45) | 滹仰父子の体用問答       | (128)       |
| (46) | 滹仰父子の浄瓶問答       | (129)       |
| (47) | 見事な燈籠           | (130)       |
| (48) | 滹仰父子の枯樹問答       | (131)       |
| (49) | 囚に停めて智を長ず       | (132)       |
| (50) | 牛の見張り           | (133)       |
| (51) | 田中に幾人いるか        | (134)の(135) |
| (52) | 滹仰父子の禅学問答       | (136)の(137) |
| (53) | 三界の太鼓・須弥の槌      | (138)の(139) |
| (54) | 鴉の落とした熟柿        | (140)       |
| (55) | 処微和尚との名前問答      | (141)       |
| (56) | 有舌土と無舌土         | (142)の(143) |
| (57) | 悟を仮るや           | (144)       |
| (58) | 巖頭の払子・仰山の坐具     | (145)の(146) |
| (59) | 高処高平、低処低平       | (147)       |

(以上第一八号)

|      |                 |             |      |                  |             |
|------|-----------------|-------------|------|------------------|-------------|
| (60) | 施主、絹を供養す        | (148)       | (78) | 禾は刈るに好きや         | (168)       |
| (61) | 仰山の道理           | (149)       | (79) | 天が寒いか、人が寒いか      | (169)       |
| (62) | 見事な雨            | (150)       | (80) | 石霜会下の二禅客         | (170)       |
| (63) | 煩惱を断ぜずして涅槃に入る   | (151)       | (81) | 仰山と香巖の夢判断        | (171)       |
| (64) | 幽州の米の値段         | (152)       | (82) | 五峰常観の「牛問答」の仰山の別語 | (172)       |
| (65) | 仰山の弘子・僧の喝       | (153)       | (83) | 石霜・耽源・瀧山との死屍問答   | (173)       |
| (66) | 仰山、鏡を叩き割る       | (154)       | (84) | 古堤和尚との無仏性問答      | (174)       |
| (67) | 杖はどこから得たか       | (155)       | (85) | 靈鷲閑に無言の聴き方を問う    | (175)       |
| (68) | 弘子は六十四卦のいずれか    | (156)       | (86) | 上林戒靈の「甲冑問答」の代語   | (176) (177) |
| (69) | 僧靈通ならば燈籠に入って欲しい | (157)       | (87) | 臨済が奪った黄蘗の鑊       | (178)       |
| (70) | どれが禅牀か          | (158)       | (88) | 維那を生き埋めとした臨済     | (179)       |
| (71) | 毗盧の師・和尚の師       | (159)       | (89) | 臨済の坐禅と上座のいねむり    | (180)       |
| (72) | 天堂と地獄の距離        | (160)       | (90) | 臨済栽杉の話の評         | (181) (182) |
| (73) | 観音院での看經         | (161)       | (91) | わたしの名前は慧然です      | (183)       |
| (74) | 遺偈              | (162)       | (92) | 石室善道の仏法を探る―別の記録  | (184)       |
| (75) | 大耳三蔵の他心通        | (163)       | (93) | 石室善道の下を離る        | (185)       |
| (76) | 中邑洪恩への謝戒        | (164) (166) | (94) | 巖頭全豁の参学          | (186)       |
| (77) | 『涅槃經』はすべて魔説     | (167)       | (95) | 明招徳謙の「仰山插鋏話」     | (187)       |

(58) 巖頭の弘子・仰山の坐具(以下、『景德伝燈録』卷一一の仰山慧寂の章)

尋往江陵、受戒。住夏探律蔵。後参巖頭。巖頭举起弘子。師展坐具。巖拈弘子置背後。寂将坐具搭肩上而出。巖云、我不尋いで江陵に往きて受戒す。夏に住まりて律蔵を探る。後に巖頭に参ず。巖頭、弘子を举起す。師、坐具を展ぶ。巖、

肯汝放、只肯汝収。

(四部叢刊本—三丁右)

弘子を拈じて背後に置く。寂、坐具を將ちて肩上に搭せて出づ。巖云く、「我、汝が放つを肯わざるも、只だ汝が収むを肯うのみ」。

(59) 高处高平、低处低平

一日随滄山開田。師問曰、遮頭得恁麼低、那頭得恁麼高。祐曰、水能平物、但以水平。師曰、水也無憑。和尚、但高处高平、低处低平。祐然之。

(同—三丁左)

一日、滄山に随つて田を開く。師問うて曰く、「遮頭は恁麼に低きを得たり。那頭は恁麼に高きを得たり」。祐曰く、「水は能く物を平ぐ。但だ水を以て平げよ」。師曰く、「水も也た憑る無し。和尚、但だ高处は高平、低处は低平なり」。祐、之を然りとす。

(60) 施主、絹を供養す

有施主送絹。寂問、和尚受施主如是供養、將何報答。祐敲禪牀示之。師曰、和尚何得將衆人物、作自己用。

(同—三丁左)

施主有りて絹を送る。寂問う、「和尚、施主の是の如き供養を受けて、何を將つてか報答せん」。祐、禪牀を敲いて之に示す。師曰く、「和尚、何ぞ衆人の物を將つて自己の用と作すを得ん」。

(61) 仰山の道理

滄山上坐举起弘子曰、若人作得道理、即与之。師曰、某甲作得道理、還得否。上坐曰、但作得道理使得。師乃掣弘子將去。  
雲居錫云、什麼處是仰山道理。

(同—三丁左—四丁右)

滄山の上坐、弘子を举起して曰く、「若し人、道理を作得さば、即ち之を与えん」。師曰く、「某甲、道理を作得せり。還た得きや」。上坐曰く、「但だ道理を作得せば便ち得し」。師乃ち弘子を掣きて將ち去れり。△雲居錫云く、「什麼の処

か是れ仰山の道理なる」V。

(62) 見事な雨

一日雨下。上坐曰、好雨。寂闇梨。師曰、好在什麼処。上坐無語。師曰、某甲却道得。上坐曰、好在什麼処。師指雨。

(同―四丁右)

一日、雨下る。上坐曰く、「好き雨なり。寂闇梨」。師曰く、「好きことは什麼の処にか在る」。上坐、語ること無し。師曰く、「某甲、却て道い得たり」。上坐曰く、「好きことは什麼にか在る」。師、雨を指す。

(63) 煩惱を断ぜずして涅槃に入る

鄭愚相公問、不断煩惱而入涅槃時、如何。師豎起払子。公曰、入之一字、不要亦得。師曰、入之一字、不為相公。法燈別云、相公不用煩惱。

(同―四丁左)

鄭愚相公問う、<sup>(151)</sup>「煩惱を断ぜずして涅槃に入る時は如何」。師、払子を豎起す。公曰く、「入の一字も要せざるも亦た得し」。師曰く、「入の一字も相公の為ならず」。△法燈別して云く、「相公は煩惱を用いず」V。

(64) 幽州の米の値段

師問僧、什麼処来。曰、幽州。師曰、我恰要箇幽州信、米作麼価。曰、某甲来時、無端從市中過、踢折他橋梁。師便休。

(同―四丁左)

師、<sup>(152)</sup>僧に問う、「什麼の処より来たる」。曰く、「幽州」。師曰く、「我れ恰も箇の幽州の信を要む。米は作麼の価ぞ」。曰く、「某甲の来時、端無く市中より過ぎ、他の橋梁を踢折す」。師、便ち休す。

(65) 仰山の払子・僧の喝

師見僧来、豎起払子。其僧便喝。師曰、喝即不無、且道、老

師、<sup>(153)</sup>僧の来たるを見て払子を豎起す。其の僧便ち喝す。師

僧過在什麼処。僧曰、和尚不合將境示人。師乃打之。

(同―四丁左―五丁右)

(66) 仰山、鏡を叩き割る

滄山封一面鏡寄師。師上堂提起云、且道、滄山鏡、仰山鏡。有人道得、即不撲破。衆無對。師乃撲破。

(同―五丁右)

(67) 杖はどこから得たか

師携一杖子。僧問、什麼処得。師便拈向背後。

僧無語。

(同―五丁右)

(68) 払子は六十四卦のいずれか

師問一僧、汝會什麼。僧曰、會卜。師提起払子曰、遮箇六十四卦中、阿那卦収。無對。師自代云、適来是雷天大壯、如今變為地火明夷。

(同―五丁右)

(69) 僧靈通ならば燈籠に入つて欲しい

師問僧、名什麼。曰、靈通。師曰、便請入燈籠。曰、早箇入

滄仰宗の盛衰(二)(石井)

曰く、「喝は即ち無きにあらず、且く道え、老僧の過、什麼の処にか在る」。僧曰く、「和尚、境を將つて人に示すべからず」。師、乃ち之を打つ。

滄山<sup>(154)</sup>、一面の鏡を封じて師に寄す。師、上堂して提起して云く、「且く道え、滄山の鏡なるや、仰山の鏡なるや。人有りて道い得ば、即ち撲破せず」。衆、對うること無し。師乃ち撲破す。

師<sup>(155)</sup>、一杖子を携える。僧問う、「什麼の処よりか得たる」。師、便ち背後に拈ず。へ僧、語無し。

師<sup>(156)</sup>、一僧に問う、「汝、什麼をか會す」。僧曰く、「卜を會す」。師、払子を提起して曰く、「遮箇<sup>これ</sup>は六十四卦中、阿那<sup>いづれ</sup>の卦にか収む」。へ對うること無し。師自ら代わりて云く、「適来は是れ雷天大壯にして、如今は變じて地火明夷と為れり」。

師<sup>(157)</sup>、僧に問う、「名は什麼ぞ」。曰く、「靈通なり」。師曰

了也。

法眼別云、喚  
什麼作燈籠。

(同―五丁右)

く、「便ち燈籠に入るを請う」。曰く、「早箇入り了れり」。  
△法眼別して云く、「什麼を喚んで燈籠と作す」▽。

(70) どれが禪牀か

僧問、古人道、見色便見心。禪牀是色。請和尚離色指学人  
心。師云、那箇是禪牀。指出来。僧無語。  
玄覺云、忽然被伊却指禪牀、  
作麼生对伊好。有僧云、却請  
和尚道。玄覺  
代拈掌三下。

(同―五丁右左)

僧問<sup>(158)</sup>、「古人道えり、色を見れば便ち心を見る、と。禪  
牀は是れ色なり。請う和尚、色を離れて学人の心を指さんこ  
とを」。師云く、「那箇<sup>どれ</sup>が是れ禪牀。指出し来たれ」。僧、語  
る無し。△玄覺云く、「忽然し伊に却って禪牀を指されば、  
作麼生か伊に対するが好し」。有る僧が云く、「却って請う、  
和尚道わんことを」。玄覺代わりて掌を拈すること三下す▽。

(71) 毗盧の師・和尚の師

僧問、如何是毗盧師。師乃叱之。又問、如何是和尚師。師曰、  
莫無礼。

(同―五丁左)

僧問<sup>(159)</sup>、「如何なるか是れ毗盧の師」。師乃ち之を叱す。又  
た問う、「如何なるか是れ和尚の師」。師曰く、「無礼なること  
莫れ」。

(72) 天堂と地獄の距離

問、天堂地獄相去幾何。師將拄杖画地一画。  
(柱)

(同―五丁左)

問<sup>(160)</sup>う、「天堂と地獄と相去ること幾何ぞ<sup>いくばく</sup>」。師、拄杖を將つ  
て地に画くこと一画す。

(73) 観音院での看経

師住観音時、出勝云、看経次、不得問事。後有僧来問訊、見

師、観音に住する時、勝を出して云く、「看経する次<sup>おち</sup>、事

師看經、傍立而待。師卷却經問、会麼。僧曰、某甲不看經、争得会。師曰、汝已後会去在。其僧到巖頭、巖頭問、什麼处来。僧云、江西觀音来。巖頭云、和尚有何言句。其僧舉前語。巖頭云、遮箇老師、我將謂被故紙埋却、元来猶在。

(同―五丁左)

(74) 遺偈

師始自仰山、後遷觀音。接機利物、為禪宗標準。(標)遷化前數年、有偈曰、

年滿七十七

老去是今日

任性自浮沈

兩手攀屈膝

於韶州東平山示滅。年七十七、抱膝而逝。敕諡智通大師、妙光之塔。後遷塔于仰山。(同―五丁左―六丁右)

(75) 大耳三藏の他心通(以下『景德伝燈録』の仰山慧寂以外の章)

時有西天大耳三藏、到京云、得他心慧眼。帝勅令与国師試驗。三藏才見師、便礼拝立于右辺。師問曰、汝得他心通邪。

を問うことを得ざれ。後に僧有りて来りて問訊し、師の看經を見て、傍に立ちて待つ。師、經を卷却して問う、「会すや」。僧曰く、「某甲、看經せず。争か会することを得ん」。師曰く、「汝、已後会し去る在り」。其の僧、巖頭に到る。巖頭問う、「什麼の処より来たる」。僧云く、「江西の觀音より来たる」。巖頭云く、「和尚、何の言句か有る」。其の僧、前語を挙す。巖頭云く、「這箇の老師、我れ故紙に埋却せらると將謂えるに、元来、猶お在り」V。

師(162)、始め仰山より、後に觀音に遷る。機を接し物を利して、禪宗の標準と為る。遷化の前數年に偈有りて曰く、

年、七十七に満つれば

老い去るは是れ今日なり

性に任せて自ら浮沈す

兩手は攀りて膝を屈す

韶州の東平山に於いて示滅す。年、七十七、膝を抱いて逝く。勅して智通大師、妙光の塔と諡し、後に塔を仰山に遷す。

(163)

時に西天の大耳三藏有りて京に到りて云く、「他心の慧眼を得たり」。帝、勅して国師と試験せしむ。三藏才わずかに師を見る

対曰、不敢。師曰、汝道、老僧即今在什麼処。曰、和尚是一国之師、何得却去西川、看競渡。師再問、汝道、老僧即今在什麼処。曰、和尚是一国之師、何得却在天津橋上、看弄獼猴。師第三問語亦同前。三藏良久、罔知去処。師叱曰、遮野狐精、他心通在什麼処。三藏無對。僧問仰山曰、大耳三藏、第三度、爲什麼不見國師。以不見。又有僧掌前語、問玄沙。玄沙曰、汝道、前兩度還見麼。玄覺云、前兩度若見、後來爲什麼不見。且道、利害在什麼処。僧問趙州曰、大耳三藏、第三度不見國師。未審、國師在什麼処。趙州云、在三藏鼻孔上。僧問玄沙、既在鼻孔上、爲什麼不見。玄沙云、只爲太近。

(卷五光宅慧忠章、四部叢刊本一二二丁左)

や便ち礼拝して右辺に立つ。師問うて曰く、「汝、他心通を得るや」。對えて曰く、「不敢」。師曰く、「汝道え、老僧、即今、什麼の処に在りや」。曰く、「和尚は是れ一国之師なり。何ぞ却って西川に去きて競渡を看るを得んや」。師再び問う、「汝道え、老僧、即今、什麼の処に在りや」。曰く、「和尚は是れ一国之師なり。何ぞ却って天津橋上に在いて獼猴を弄するを看ることを得んや」。師第三問の語も亦た前に同じくす。三藏、良久して去処を知ること罔し。師、叱して曰く、「遮の野狐精、他心通は什麼の処に在るや」。三藏、對えること無し。入僧、仰山に問うて曰く、「大耳三藏は第三度に什麼と爲てか國師を見ざるや」。仰山曰く、「前の兩度は是れ境に涉る心にして、後は自受用三昧に入る。所以に見ず」。又た僧有りて前語を挙して玄沙に問う。玄沙曰く、「汝道え、前の兩度は、還た見るや」。玄覺云く、「前の兩度は、若し見ば、後來は什麼と爲てか見ざるや。且く道え、利害、什麼の処に在るや」。僧、趙州に問うて曰く、「大耳三藏は第三度は國師を見ず。未審、國師は什麼の処に在るや」。趙州云く、「三藏の鼻孔上に在り」。僧、玄沙に問う、「既に鼻孔上に在らば、什麼と爲てか見ざるや」。玄沙云く、「只だ太だ近きが爲なり」。

朗州中邑洪恩禪師。仰山初領新戒、到謝戒。師見來、於禪牀上拍手云、和和。仰山即東邊立、又西邊立、又於中心立。然後謝戒了、却退後立。師云、什麼處得此三昧。仰云、於曹谿脱印子學來。師云、汝道、曹谿用此三昧、接什麼人。仰云、接一宿覺、用此三昧。仰云、和尚什麼處得此三昧來。師云、某甲於馬大師處、學此三昧。問、如何得見性。師云、譬如有一事。只如內獼猴困睡、外獼猴欲與相見如何。師下繩牀、執仰山手作舞云、山山與汝相見了。譬如蟪蛄、在蚊子眼睫上作窠、向十字街頭叫喚云、土曠人稀、相逢者少。雲居錫云、中邑當時、若不得仰山遮一句語、何處有中邑也。崇壽稠云、還有人定得此道理麼。若定不得、只是箇弄精魂脚手、一性義在什麼處。玄覺云、若不是仰山、爭得見中邑。且道、什麼處是仰山得見中邑處。

(卷六中邑洪恩章、四部叢刊本一〇丁左一二丁右)

朗州中邑洪恩禪師<sup>(164)</sup>。仰山<sup>(165)</sup>、初め新戒を領するに、到りて戒を謝す。師、來たるを見て禪牀上に於いて手を拍ちて云く、「和和」。仰山は即ち東邊に立ち、又た西邊に立ち、又た中心に於いて立つ。然して後に戒を謝し了りて、却って退いて後に立つ。師云く、「什麼の處にか此の三昧を得たる」。仰云く、「曹谿に於いて印子を脱して学び來たる」。師云く、「汝道え、曹谿は此の三昧を用いて什麼人を接するや」。仰云く、「二宿覺<sup>(166)</sup>を接するに此の三昧を用う」。仰云く、「和尚、什麼の處にか此の三昧を得來たる」。師云く、「某甲、馬大師の處に於いて此の三昧を學す」。問う、「如何が見性を得るや」。師云く、「譬如<sup>たとえ</sup>ば、屋有り、屋に六窓有りて、内に一獼猴有り。東邊に山山と喚べば、山山と応ず。是の如く六窓俱に喚べば、俱に応ず」。仰山、礼謝して起ちて云く、「蒙る所の和尚の譬喩は、了知せざるは無し。更に一事有り。只如<sup>たとえ</sup>ば内の獼猴の困睡せば、外の獼猴の与に相見するを欲するは如何」。師、繩牀を下りて仰山の手を執りて舞を作して云く、「山山、汝と相見し了れり。譬如<sup>たとえ</sup>ば、蟪蛄の蚊子の眼睫上に在いて窠を作り、十字街頭に向いて叫喚して云く、土の曠<sup>ひら</sup>くして人の稀なるに、相逢う者少し、と」。△雲居錫云く、「中邑<sup>そのかみ</sup>當時、若し仰山の遮の一句語を得ざれば、何の處にか中邑有らん」。崇壽稠云く、「還<sup>は</sup>た人の此の道理を定め得ること有りや。若し定め得ずんば、只だ是れ箇の精魂を弄する脚手にして、仏

## (77) 『涅槃經』はすべて魔説

師問仰山、涅槃經四十卷、多少仏説、多少魔説。仰山云、総是魔説。師云、已後無人奈子何。仰山云、慧寂即一期之事。行履在什麼処。師云、只貴子眼正、不説子行履。

(卷九鴻山靈祐章、四部叢刊本一四丁右)

## (78) 禾は刈るに好きや

師問仰山、從何処帰。仰山云、田中帰。師云、禾好刈也未。仰山云、好刈也。師云、作青見、作黄見、作不青不黄見。仰山云、和尚、背後是什麼。師云、子還見麼。仰山拈起禾穗云、和尚、何曾問遮箇。師云、此是鵝王捩乳。

(同一四丁左一五丁右)

## (79) 天が寒いか、人が寒いか

冬月、師問仰山、天寒人寒。仰山云、大家在遮裏。師云、何

性の義は什麼の処にか在らん。玄覺云く、「若し是れ仰山にあらざれば、争か中邑に見ゆるを得ん。且く道え、什麼の処か是れ仰山の中邑に見ゆるを得る処」V。

師<sup>(167)</sup>、仰山に問う、「『涅槃經』四十卷は、多少か仏説、多少か魔説」。仰山云く、「総て是れ魔説」。師云く、「已後、人の子を奈何ともする無し」。仰山云く、「慧寂は即ち一期の事なり。行履は什麼の処に在るや」。師云く、「只だ子の眼の正しきを貴ぶのみにして、子の行履を説かず」。

師<sup>(168)</sup>、仰山に問う、「何の処より帰る」。仰山云く、「田中より帰る」。師云く、「禾は刈るに好きや」。仰山云く、「刈るに好きなり」。師云く、「青の見を作すや、黄の見を作すや、不黄の見を作すや」。仰山云く、「和尚、背後は是れ什麼ぞ」。師云く、「子、還た見るや」。仰山、禾穗を拈起して云く、「和尚、何ぞ曾て遮箇を問うや」。師云く、「此は是れ鵝王の乳を捩ぶなり」。

冬月<sup>(169)</sup>、師、仰山に問う、「天、寒きか、人、寒きか」。仰山

不直説。仰山云、適来也不曲、和尚如何。師云、直須随流。

(同―五丁右)

(80) 石霜会下の二禅客

石霜会下、有二禅客、到云、此間無一人会禅。後普請般柴。仰山見二禅客歇、将一椶柴、問云、還道得麼。俱無語。仰山云、莫道無人会禅好。帰拳似滄山云、今日二禅客、被慧寂勘破。師云、什麼処被子勘破。仰山便拳前話。師云、寂子又被吾勘破。

雲居錫云、什麼処是滄山勘破仰山処。

(同―五丁右)

(81) 仰山と香巖の夢判断

師睡次、仰山問訊。師便廻面向壁。仰山云、和尚何得如此。師起云、我適来得一夢、汝試為我原看。仰山取一盆水与師洗面。少頃香巖亦来問訊。師云、我適来得一夢、寂子原了。汝更与我原看。香巖乃点一碗茶来。師云、二子見解過於鶯子。

(同―五丁右左)

云く、「大家は遮裏に在り」。師云く、「何ぞ直説せざる」。仰山云く、「適来も也た曲らず。和尚は如何」。師云く、「直須く流れに随うべし」。

石霜の会下に二禅客有りて到りて云く、「此間に一人の禅を会するもの無し」。後に普請して柴を般ぶ。仰山、二禅客の歇むを見て、一椶の柴を将ちて問うて云く、「還た道い得るや」。俱に語ること無し。仰山云く、「人の禅を会すること無しと道うこと莫くんば好し」。帰りて滄山に拳似して云く、「今日、二禅客は慧寂に勘破せらる」。師云く、「什麼の処か子に勘破せらる」。仰山、便ち前話を拳す。師云く、「寂子も又た吾に勘破せらる」。△雲居錫云く、「什麼の処か是れ滄山の仰山を勘破する処」▽

師睡次、仰山、問訊す。師便ち面を廻して壁に向かう。仰山云く、「和尚、何ぞ此の如きを得るや」。師起ちて云く、「我れ適来、一夢を得たり。汝、試みに我が為に原ね看よ」。仰山、一盆の水を取りて師に与えて洗面せしむ。少頃して香巖亦た来たりて問訊す。師云く、「我れ適来、一夢を得て、寂子は原ね了る。汝、更に我が与に原ね看よ」。香巖乃ち一碗の

茶を点じ来たる。師云く、「二子の見解は鶯子よりも過ぎたり」。

(82) 五峰常観の「牛問答」の仰山の別語

師問一僧、汝還見牛麼。僧云、見。師云、見左角、見右角。  
僧無對 師自代云、見無左右。  
仰山別云、還并左右麼。

(卷九五峰常観章、四部叢刊本一八丁左)

(83) 石霜・耽源・瀧山との死屍問答

師喚沙弥、拽出死屍著。  
沙弥即仰山也 沙弥後拳問耽源、如何出得井中人。耽源曰、咄、痴漢。誰在井中。後問瀧山、如何出得井中人。瀧山乃呼慧寂。寂応諾。瀧山曰、出也。及住仰山、嘗拳前語、謂衆曰、我耽源処得名、瀧山処得地。

(卷九石霜性空章、四部叢刊本一九丁右)

(84) 古堤和尚との無仏性問答

朗州古堤和尚。尋常見僧来、每云、去、汝無仏性。僧無對。或有對者、莫契其旨。一日、仰山慧寂、到參。師云、去、汝無仏性。寂叉手近前応諾。師笑曰、子什麼処得此三昧。寂

師<sup>(172)</sup> 一僧に問う、「汝、還た牛を見るや」。僧云く、「見る」。師云く、「左の角を見るや、右の角を見るや」。入僧、對うる無し。師自ら代わりて云く、「見に左右無し」。入仰山別して云く、「還た左右を弁せんや」。

師<sup>(173)</sup> 沙弥を喚ぶ、「死屍を拽出せよ」。入沙弥は即ち仰山なり。沙弥、後に拳して耽源に問う、「如何が井中の人を出し得るや」。耽源曰く、「咄。痴漢。誰か井中に在る」。後に瀧山に問う、「如何が井中の人を出し得るや」。瀧山乃ち「慧寂」と呼ぶ。寂、応諾す。瀧山曰く、「出でたり」。仰山に住するに及び、嘗て前語を拳して衆に謂いて曰く、「我れ耽源の処にて名を得、瀧山の処にて地を得たり」。

朗州古堤和尚<sup>(174)</sup>、尋常、僧の来たるを見て、毎に云く、「去け。汝は仏性無し」。僧、對える無し。或し對える者有るも、其の旨に契う莫し。一日、仰山慧寂、到り參ず。師云く、「去

曰、我從滄山得。寂問曰、和尚從誰得。師曰、我從章敬得。

(卷九朗州古提章、四部叢刊本一一五丁右)

(85) 靈鷲閑に無言の聴き方を問う

仰山問、寂寂無言、如何視聴。師云、無縫塔前多雨水。

(卷一〇靈鷲閑章、四部叢刊本一一〇丁右)

(86) 上林戒靈の「甲冑問答」の代語

湖南上林戒靈禪師。初參滄山。曰、大德、作什麼來。師曰、介冑全具。滄山曰、尽卸了來、与大德相見。師曰、卸了也。滄山咄曰、賊尚未打、卸作什麼。師無對。仰山代云、請和尚屏左右。滄山以手揖云、諾諾。師後參永泰、方喻其旨。

(卷一〇上林戒靈章、四部叢刊本一一三丁右)

(87) 臨済が奪った黄蘗の鑊くわ

黄蘗普請鋤蕙穀。迴見師在後空手立、乃問、鑊在何處。師曰、上坐將去也。黄蘗曰、近前來、共汝商量。師向前叉手。黄蘗將鑊鑊地曰、我遮鑊、天下人拈𢦏不起。還有人拈得起

滄仰宗の盛衰(二)(石井)

け。汝は仏性無し。寂、叉手して近前し、応諾す。師、笑いて曰く、「子なんじ、什麼の処にて此の三昧を得たる」。寂曰く、「我れ滄山より得たる」。寂問うて曰く、「和尚、誰より得たる」。師曰く、「我れ章敬より得たる」。

仰山問(175)、「寂寂として言無ければ、如何が視聴す」。師云く、「無縫塔前に雨水多し」。

湖南の上林戒靈禪師(176)、初め滄山に参ず。曰く、「大德、什麼なにを作し來たる」。師曰く、「介冑、全く具す」。滄山曰く、「尽く卸おろしりて來らば、大德と相見せん」。師曰く、「卸おろしてれり」。滄山咄して曰く、「賊すら尚お未だ打たず。卸して什麼をか作す」。師、對えること無し。仰山代わりて云く、「請う和尚、左右を屏しりぞけよ」。滄山、手を以て揖して云く、「諾諾」。師、後に永泰(177)に参じて方めて其の旨さとを喻る。

黄蘗(178)、普請して蕙穀はとむぎを鋤すく。師の後に在りて空手にして立つを廻見して、乃ち問う、「鑊くわは何の処いづれに在りや」。師曰く、「上坐、將もち去れり」。黄蘗曰く、「近前し來れ。汝と商量せ

麼。師掣得、举起云、鏝在義玄手裏。黄蘗曰、今日自有人赴普請、我不著去也。便自帰院。瀧山因仰山侍立次、方拏此話未了、仰山便問、鏝在黄蘗手裏、為什麼被臨濟奪却。瀧山云、

賊是小人、智過君子。

(卷一二臨濟義玄章、四部叢刊本一三丁左)

(88) 維那を生き埋めとした臨濟

黄蘗一日普請、鋤茶園。黄蘗後至。師問訊按鏝而立。黄蘗曰、莫是困邪。曰、纔鏝地、何言困。黄蘗<sup>(住)</sup>拄杖便打。師接杖、推倒和尚。黄蘗呼、維那、維那、拽起我来。維那拽起曰、和尚争容得遮風漢。黄蘗却打維那。師自鏝地云、諸方即火葬、我遮裏活埋。瀧山問仰山、只如黄蘗与臨濟此時意作麼生。仰山云、作賊人不死、羅賊人喫棒。瀧山云、如是如是。

(同一三丁左、四丁右)

ん。師、向前して叉手す。黄蘗は鏝を將つて地を鏝りて曰く、「我が遮の鏝は、天下人も拈<sup>ねんてつふ</sup>致不起。還た人の拈得起する有りや」。師は掣得して举起して云く、「鏝は義玄の手裏に在り」。黄蘗曰く、「今日、自ら人の普請に赴く有り。我れ著かずして去れり」。便ち自ら院に帰る。△瀧山、因みに仰山の侍立する次、方に此の話を拏して未だ了らざるに、仰山便ち問う、「鏝は黄蘗の手裏に在りしに、什麼と為てか臨濟に奪却せらる」。瀧山云く、「賊は是れ小人、智は君子に過ぎたり」▽。

黄蘗<sup>(179)</sup>、一日、普請して茶園を鋤く。黄蘗、後に至る。師は問訊して鏝を按じて立つ。黄蘗曰く、「是れ困ずること莫しや」。曰く、「纔に地を鏝るに、何ぞ困ずると言わんや」。黄蘗、拄杖を拏して便ち打つ。師は杖を接して和尚を推倒す。

黄蘗は呼ぶ、「維那、維那。我れを拽<sup>ひ</sup>き起こし来れ」。維那は拽き起こして曰く、「和尚、争か遮の風漢を容し得ん」。黄蘗、却つて維那を打つ。師、自ら地を鏝りて云く、「諸方は即ち火葬するも、我が遮裏は活埋せん」。△瀧山、仰山に問う、「只如ば黄蘗と臨濟との此の時の意は作麼生<sup>そもさん</sup>」。仰山云く、「賊と作る人死せず、賊を羅<sup>あみ</sup>する人棒を喫す」。瀧山云く、「如是如是」▽。

## (89) 臨濟の坐禪と上座のいねむり

師一日在黄蘗僧堂裏睡。黄蘗入来、以拄杖於牀邊敲三下。師  
 挙首見是和尚却睡。黄蘗打席三下。去上間見第一坐。黄蘗  
 曰、遮醉漢、豈不知下間禪客坐禪、汝只管瞌睡。上坐曰、遮  
 老和尚患風邪。黄蘗打之。（同）

（同） 瀉山等問仰山、只如黄蘗意作  
 麼生。仰山云、一彩兩賽。

## (90) 臨濟栽杉の話の評

師与黄蘗栽杉。黄蘗曰、深山裏栽許多樹作麼。師曰、与後人  
 作古記。乃將鋤拍地兩下。黄蘗拈起拄杖曰、汝喫我棒了也。

師作嘘虚声。（嘘）黄蘗曰、吾宗到汝、此記方出。（同）

為復別有旨。仰山云、亦囑臨濟、亦記向後。瀉山云、向後作麼生。仰山云、一人指南、吳  
 越令行。南塔和尚注云、独坐震威、此記方出。又云、若遇大風、此記亦出。瀉山云、如  
 是如是。

（同）

師、一日、黄蘗の僧堂裏に在いて睡る。黄蘗、入り来りて  
 拄杖を以て牀邊を敲つこと三下す。師、首を挙げて是れ和尚  
 なるを見て却に睡る。黄蘗、席を打つこと三下す。上間に去  
 きて第一坐を見る。黄蘗曰く、「遮の醉漢、豈に知らずや、  
 下間の禪客は坐禪して、汝は只管だ瞌睡することを」。上坐  
 曰く、「遮の老和尚、風を患うや」。黄蘗、之を打つ。△瀉山、  
 挙して仰山に問う、「只如ば黄蘗の意、作麼生」。仰山云く、  
 「二彩兩賽」△。

師、黄蘗と杉を栽ゆ。黄蘗曰く、「深山裏に許多の樹を栽  
 えて作麼」。師曰く、「後人の与に古記と作す」。乃ち鋤を將  
 ちて地を拍つこと兩下す。黄蘗、拄杖を拈起して曰く、「汝、  
 我が棒を喫し了れり」。師、嘘虚の声を作す。黄蘗曰く、「吾  
 が宗、汝に到りて、此の記方めて出でん」。△瀉山、挙して  
 仰山に問う、「且く道え、黄蘗の後語は但だ臨濟を囑するの  
 みか、為復別に意旨有るか」。仰山云く、「亦た臨濟を囑し、  
 亦た向後を記す」。瀉山云く、「向後は作麼生」。仰山云く、  
 「二人の南を指して吳越に令行なわる」。△南塔和尚、注して  
 云く、「独り坐して威を震いて此の記方めて出でん」。又た

(91) わたしの名前は慧然です

鎮州三聖院慧然禪師。自臨濟受訣、遍歷叢林、至仰山。仰山問、汝名什麼。師曰、名慧寂。仰山曰、慧寂是我名。師曰、我名慧然。仰山大笑而已。

(卷一二三聖慧然章、四部叢刊本一一二丁右)

(92) 石室善道の仏法を探る―別の記録

仰山問、仏之与道相去幾何。師曰、道如展手、仏似握拳。曰、畢竟如何的当、可信可依。師以手撥空三兩下曰、無恁麼事、無恁麼事。曰、還仮看教否。師曰、三乘十二分教、是分外之事。若与他作対、即是心境兩法、能所双行、便有種種見解、亦是狂慧、未足為道。若不与他作対、一事也無。所以祖師云、本来無一物。汝不見、小兒出胎時、可道我解看教不解看教、当恁麼時、亦不知有仏性義無仏性義。及至長大、便學種種知解、出来便道、我能我解。不知是客塵煩惱。十六行中、嬰兒行為最。哆哆和和時、喻學道之人離分別取捨心。故讚歎嬰兒。可況喻取之。若謂嬰兒是道、今時錯會。

(卷一四石室善道章、四部叢刊本一一八丁左一九丁右)

云く、「若し大風に遇わば、此の記も亦た出でん」。瀧山云く、「如是如是」V。

鎮州三聖院慧然禪師<sup>(183)</sup>。臨濟の訣を受けてより叢林を遍歴し、仰山に至る。仰山問う、「汝の名は什麼ぞ」。師曰く、「慧寂と名づく」。仰山曰く、「慧寂は是れ我が名なり」。師曰く、「我が名は慧然なり」。仰山、大いに笑うのみ。

仰山問う、<sup>(184)</sup>「仏と道と相い去ること幾何ぞ<sup>いくばく</sup>」。師曰く、「道は手を展ぶるが如く、仏は拳を握るが如し」。曰く、「畢竟、如何が的当にして信ずべく依るべきや」。師、手を以て空を撥<sup>はら</sup>うこと三兩下して曰く、「恁麼の事無し、恁麼の事無し」。曰く、「還<sup>は</sup>た教を見るを仮るや」。師曰く、「三乘十二分教は是れ分外の事なり。若し他の与<sup>ため</sup>に對<sup>こた</sup>えを作さば、即ち是れ心境の兩法にして、能所<sup>なる</sup>双<sup>たう</sup>び行ずるなり、便ち種種の見解有るも、亦た是れ狂慧にして、未だ道と為すに足らず。若し他の与に對<sup>こた</sup>えを作さざれば、一事も也た無し。所以に祖師云く、本来無一物、と。汝、見<sup>ま</sup>かずや、小兒の胎を出ずる時、可<sup>も</sup>し我れの教を看ることを解すと教を看ることを解せざるとを道うも、恁麼の時に当りて、亦た仏性の義有ると仏性の義無きと

## (93) 石室善道の下を離る

仰山辞。師送出門、乃召曰、闍梨。仰山応諾。師曰、莫一向去、却迴遮辺来。

(同一一九丁右)

を知らず。長大なるに至るに及びて便ち種種の知解を学び、出で来りて便ち道う、我れ能くし我れ解す、と。知らず、是れ客塵煩惱なることを。十六行中、嬰兒行を最と為す。哆哆和和の時、学道の人分別取捨の心を離るるに喩う。故に嬰兒を讃歎す。可に況んや喩えて之を取ることをや。若し嬰兒是れ道なりと謂わば、今時、錯りて会するなり」。

## (94) 巖頭全豁の参学

鄂州巖頭全豁禪師、泉州人也。姓柯氏。少礼清原諠公、落髮。<sup>(往)</sup>住長安宝寿寺、稟戒、習経律諸部。優遊禪苑、与雪峰<sup>存義</sup>欽山<sup>文遂</sup>為友。自余杭大慈山、遷迤造于臨濟。属臨濟帰寂、乃謁仰山。才入門、提起坐具曰、和尚。仰山取扠子、擬拏之。師曰、不妨好手。

(卷一六巖頭全豁章、四部叢刊本一二丁左)

仰山<sup>(185)</sup>、辞す。師、門より送り出して、乃ち召して曰く、「闍梨」。仰山、応諾す。師曰く、「一向に去くこと莫れ。遮<sup>こ</sup>辺に却迴<sup>きやうい</sup>し来れ」。

## (95) 明招徳謙の「仰山插鋤話」

鄂州巖頭全豁禪師<sup>(186)</sup>は、泉州の人なり。姓は柯氏。少にして清原諠公を礼して落髮す。長安宝寿寺に往きて戒を稟<sup>うけ</sup>け、経律の諸部を習う。禪苑に優遊し、雪峰<sup>存義</sup>と欽山<sup>文遂</sup>と友と為る。余杭の大慈山より遷迤して臨濟に造<sup>いた</sup>らんとす。臨濟の帰寂に属し、乃ち仰山に謁す。才に門<sup>かど</sup>に入るや、坐具を提起して曰く、「和尚」。仰山、扠子を取りて之を拏さんと擬す。師曰く、「不妨<sup>はなは</sup>だ好手なり」。

清八路、挙仰山插歛話問師、古人意在叉手処、意在插歛処。師曰、清上坐。清応諾。師曰、還曾夢見仰山麼。清曰、不要下語、只要上高商量。師曰、若要商量、堂頭自有一千五百人老師在。

(卷二三明招德謙章、四部叢刊本一二丁左一二三丁右)

清八路、仰山の歛<sup>くわ</sup>を插<sup>さしはさ</sup>む話を挙げて師に問う、「古人の意は叉手の処に在りや、意は歛を插む処に在りや」。師曰く、「清上坐」。清、応諾す。師曰く、「還<sup>は</sup>た曾て夢に仰山を見しや」。清曰く、「下語を要せず。只だ上高の商量を要するのみ」。師曰く、「若し商量を要せば、堂頭に自ら一千五百人の老師有る在り」。

(1) 陸希声<sup>二</sup>生没年不明。蘇州呉県の人。博学で文をよくし論著が多い。商州刺史鄭愚に見出され、召されて右拾遺となる。王仙芝の叛乱後に、歙州刺史に拔擢される。昭宗(八八八〜九〇四年在位)の時に、給事中となり、戸部侍郎・同中書門下平章事を拝す。太子少師をもって罷める。没後、尚書左僕射を贈られ、諡を文という。『新唐書』卷一一六に伝がある。

(2) 文宗朝<sup>二</sup>文宗(八〇八〜八四〇)、穆宗の第二子。八二六〜八四〇年在位。開成五年一月四日に没す。世寿三三。『旧唐書』卷一七、『新唐書』卷八に伝がある。

(3) 大瀉山大円禅師<sup>二</sup>靈祐(七七二〜八五三)。福州長溪県の趙氏に生まれる。百丈懷海の法嗣。潭州(湖南省)大瀉山に住す。大中七年一月九日に示寂す。世寿八三、僧臘五五。大円禅師と諡す。鄭愚撰「潭州大瀉山同慶寺大円禅師碑銘并序」(『全唐文』卷八二〇)、『宋高僧伝』卷一一に伝記がある。靈祐については後に検討する。

(4) 大安<sup>二</sup>大安(七九三〜八八三)。閩城(福建省)の陳氏に生まれる。百丈懷海の法嗣と伝えられるが、靈祐の法嗣にふさわしい。尾崎正善「瀉山靈祐と福州大安」(『駒沢大学大学院年報』第二〇号、一九八七年二月)参照。福州怡山(長慶寺)に住す。中和三年一月二二日に示寂す。世寿九一、僧臘六七。『宋高僧伝』卷一二に伝がある。大安については、後に検討する。

(5) 香巖<sup>二</sup>智閑(?〜八九五?)。青州(山東省)に生まれる。瀉山靈祐の法嗣。鄧州(河南省)香巖山に住す。『宗統編年』卷一七に光化元年(八九八)の示寂とするも、検討が必要である。『宋高僧伝』卷一三に伝がある。襲燈大師と諡す。智閑については、後に検討する。

(6) 石亭観音院<sup>二</sup>『新建県志』卷三〇に、「章江門の外に在り。唐に建つ。前觀察使韋丹、遺愛の碑有り、覆うに石亭を以てす。大中三年(八五九)、丹の子の宙、江西を觀察し、奏して以て石亭院と為す。裴休、題額す。宋の政和の間(一一一一〜一一一八)に廢れ

- て観と為る。明の初め（一三六八）、復た寺と為り、亦た石亭観音院と称す。仰山慧寂禅師、曾て錫を此に住む。<sup>とど</sup>（以下略）」とある。『江西通志』卷二二の「石亭寺」の項に同様の記事が存す。また、『南昌府志』卷一四に、「石亭寺。章江門の外に在り。唐の時、僧靈徹、建つ。仰山慧寂禅師、此に於いて教を演ぶ。初めは大悲寺と名づけ、又た観音院と名づく。寺の左に觀察使韋丹の遺愛碑有り。覆うに石亭を以てす。大中一五年、丹の子の宙、江西を觀察し、奏して以て石亭院と為す」とあり、以下『新建縣志』と同様の文あり。
- (7) 東平Ⅱ広東省韶州の東平山弘祖禅院のことである。余靖撰「韶州重建東平山正覺寺記」（『武溪集』卷七）の資料は、後に紹介する。
- (8) 光昧Ⅱ伝不詳。燈史類には仰山慧寂の弟子の名として記されていない。
- (9) 東山Ⅱ湖北省蘄州黄梅縣の五祖弘忍の道場である東山か、あるいは東平山をいうか。
- (10) 襄州Ⅱ湖北省襄陽郡。『新唐書』卷四〇。
- (11) 香巖の碑Ⅱ現存しない。
- (12) 『西域秘記』Ⅱ不詳。
- (13) 韶州Ⅱ広東省韶州始興郡。曲江、始興、樂昌、翁源、仁化、潁昌の六縣を有す。『新唐書』卷四三。
- (14) 曹溪の云う所の……Ⅱ『曹溪大師伝』の「若欲將心要者、一切善惡都莫思量。心体湛寂、応用自在」とか「善惡都莫思量、自然得入心体、湛然常寂、妙用恒沙」（共に拙稿『曹溪大師伝』考）九八～九九頁、『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四六号、昭和六三年三月）の語を受けた『宝林伝』の六祖章によると考えられる。拙稿「仰山慧寂と『六祖壇経』」（『印仏研』第三六卷第二号、昭和六三年三月）参照。
- (15) 一体異用Ⅱ瀉仰宗の性格を体用論で論じた点は注目される。
- (16) 仰山Ⅱ江西省袁州宜春縣に存す。『宜春縣志』卷二の「太平興國寺」の項に、「城南の集雲郷の大仰山の下に在り。即ち慧寂禅師の真を修する処なり。唐の会昌（八四一～八四六）に、賜わけて棲隱と名づく。宋に今額に改む。唐宋の賜経、御書、碑碣、甚だ多きも、俱に毀つ。僅に元の程鉅夫撰する碑記存す」とある。仰山は、道教と結びついて発展する。程文海撰「大仰山重建太平興國禅寺碑」（『宜春縣志』卷二）、朱恂撰「仰山廟記」（『全唐文』卷八七一）および張商英撰「仰山廟記」（『袁州府志』卷三二）については、後に紹介する。
- (17) 国師忠和尚Ⅱ慧忠（？～七七六）。浙江省越州諸暨縣の冉氏に生まれる。六祖慧能の法嗣。南陽龍興寺、均州武当山に住す。肅宗、代宗の時に入内す。大曆一〇年二月九日（新曆七七六年一月四日）に示寂す。大証禅師と諡す。『宋高僧伝』卷九に伝がある。
- 瀉仰宗の盛衰Ⅱ（石井）

- (18) 而して学者……南陽慧忠の南方禪批判に通じ、作用即性説への批判である。拙稿「南陽慧忠の南方宗旨の批判について」(鎌田茂雄監修『中国の仏教と文化』所収、大蔵出版、昭和六三年一月刊行予定) および拙著『宋代禪宗史の研究』(大東出版社、昭和六二年一月)一三九頁参照。

- (19) 通智大師妙光之塔通智大師を『宋高僧伝』『祖堂集』『景德伝燈録』は、智通大師としている。『武溪集』には、両方の表記がみられ、外に知宗大師とも伝える。『祖堂集』や『武溪集』は、賜号の澄虚大師も伝える。注(37)を参照。

- (20) 韶州漬昌注(13) 参照。

- (21) 左の無名指及び小指を断ち同じ例が弟子の南塔光涌にみられる。後に紹介する宋齊邱撰「仰山光涌長老塔銘」を参照されたい。

- (22) 器を藉てて『法華経』の「薬王菩薩本事品」に「宿王華よ、若し発心して阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する者有らば、能く手の指乃至、足の一指を燃して仏塔を供養せよ。国城・妻子及び三千大千国土の山・林・河・池、諸の珍宝物をもつて供養せん者に勝らん」(岩波文庫本巻下一一九四頁)にあるように、発心求法を示したものであろう。拙著『中国禪宗史話』(禅文化研究所、昭和六三年三月)三二六頁参照。

- (23) 南華寺通禪師生没年不明。浙江省婺州双林寺で出家し、婺州和安寺に住す。さらに百丈懷海に嗣法し、韶州南華寺に住す。南華寺は、六祖慧能の住持地である。通については、鈴木哲雄『唐五代禪宗史』(山喜房仏書林、昭和六〇年二月)三九一四一頁参照。

- (24) 息慈沙弥(sramanera)のこと。世事を息め、慈悲にもとづき群生を救済するの意。

- (25) 耽源真応(生没年不明)、応真とも伝える。『祖堂集』巻四によれば、もと馬祖道一の門人であったと言う。南陽慧忠の法嗣。江西省吉州耽源山に住す。仰山が真応より円相の教えを受けたことは、瀉仰宗の宗風で大事である。『伝燈録』巻二三に問答がある。

- (26) 跛脚馱烏……慧寂の渾名。馱烏は三沙弥の一つで、僧の食物を奪う烏を追い払う沙弥の意。一般に七一二三歳までの沙弥をさす。

- (27) 時に……『祖堂集』については、(13)の項目を参照されたい。

- (28) 韋胄韋宙(?一八六八)のこと。宙、京兆万年の人。父は丹。河南府司録参軍となり、父の徳により侍御史を拜す。大中一二年(八五八)に江西觀察使となり、咸通二年(八六一)に嶺南節度使に遷る。検校尚書左僕射、同中書門下平章事に加えられる。咸通九年に没す。『新唐書』巻一九七に伝がある。『唐方鎮年表』巻五・七参照。

- (29) 仰山の門風注(25)に述べたように、円相を示すことが、仰山の門風の特色となり、瀉仰宗の宗風となる。南陽慧忠の流れよりその門風が確立した点は注意してよいであろう。注(18)の拙稿で、そのことについて問題にしてみた。

(30) 懷化Ⅱここでは、韶州東平山弘祖禪院での活躍をさす。つづいて韶州懷化とある様に、韶州内を言う。韶州については、注(13)参照。懷化は、広州南海郡番禺県を呼ぶこともあったが、唐代では、韶州とするのがよいであろう。

(31) 宗禪師Ⅱ(24)の項目に問答があり、注(70)の(2)に示した『伝燈録』巻八の韶州乳源との問答から考えて、宗禪師と韶州乳源とは同一人としてよいであろう。場所もふさわしい。乳源については、馬祖の法嗣であること以外に詳伝は不明である。その外に(83)の項目に百丈懷海の法嗣に石霜性空がいて、仰山が沙弥の頃に参じていたことが知られている。「宗」と「空」との類似からはこの人とも言えないことはないが、『祖堂集』に残る問答より乳源と考えておきたい。

(32) 初めて到りて……Ⅱ仰山と瀉山の初相見に到る過程と問答は、『伝燈録』巻二に次のように述べる。

①袁州仰山慧寂禪師、韶州懷化人也。姓葉氏。年十五、欲出家、父母不許。後二載、師断手二指、跪致父母前、誓求正法以答劬勞。

②遂依南華寺通禪師、落髮。未登具、即遊方。初謁耽源、已悟玄旨。

③後参瀉山。遂升堂奥。祐問曰、汝是有主沙弥、無主沙弥。師曰、有主。曰、在什麼處。師從西過東立。祐知是異人、便垂開示。寂問、如何是真仏住處。祐曰、以思無思之妙、返思靈燄之無窮。思尽還源、性相常住、事理不二、真仏如如。師於言下頓悟。自此執侍。

(四部叢刊本—三丁右)

袁州仰山慧寂禪師は、韶州懷化の人なり。姓は葉氏。年十五にして、出家せんと欲するも、父母、許さず。後、二載にして、師、手の二指を断ち、跪いて父母の前に致し、正法を求めて以て劬勞に答えんことを誓う。

遂に南華寺通禪師に依りて落髮す。未だ具に登らざるに、即ち遊方す。初め耽源に謁して、已に玄旨を悟る。

後に瀉山に参ず。遂に堂奥に升る。祐問うて曰く、「汝は是れ有主沙弥や、無主沙弥や」。師曰く、「主有り」。曰く、「什麼の處に在りや」。師は西より東に過ぎて立つ。祐は是れ異人なるを知り、便ち開示を垂る。寂問う、「如何なるか思や真仏の住處」。祐曰く、「思・無思の妙を以て、靈燄の無窮に返思す。思尽きて源に還れば、性相常住、事理不二にして真仏如如なり」。師、言下に於いて頓悟す。此より執侍す。

(33) 思・無思……Ⅱ瀉山の中心思想と言えるもの。仰山が瀉山の禪として継承したものと同じ。項目(4)参照。

(34) 驚子の利弁は大雄の化を光かすⅡ仰山は驚子(舍利弗)に諭えられている。『武溪集』巻七では、「小釈迦」と呼ばれ、『臨濟録』等

にもみえる。小釈迦の呼称については、尾崎正善「仰山小釈迦考」(『駒沢大学大学院年報』第二号、一九八八年二月)参照。なお、瀉山の下を離れて後に受戒したことを具体的に述べるのは、『伝燈録』だけにあり、(58)の項目と注(145)を参照。

(35) 前後の諸州府……仰山慧寂は会昌元年(八四一)の三五歳のときに仰山に住し、石亭観音院を経て、韶州東平山弘祖禅院に示寂するまで住す。韋宙が慧寂を石亭観音院や東平山に招いた可能性が高い。『唐方鎮年表』を参考にすると、韋宙以降の嶺南東道節度使は、鄭愚、鄭從讜、韋荷、李迢、鄭統の五人であり、会昌元年以降の江西觀察使は、裴休、周墀、紇干皐、裴儔、周敬復、鄭祇徳、張毅夫、鄭憲の八人がいる。一人とは、韋宙、鄭愚を含めて、これらの刺史をさすであろう。

(36) 三処Ⅱ注(16)の袁州仰山、注(6)の洪州石亭、注(7)の韶州東平山をさす。なお、仰山住持以前に郴州王莽山に隠れていたことは、張商英撰「仰山廟記」に示す所であるが、『伝燈録』巻一にも次のようにある。

師盤桓瀉山、前後十五載。凡有語句、学衆無不弭伏。暨受瀉山密印、領衆住王莽山、化縁未契。遷止仰山、学徒臻萃。

(四部叢刊本一四丁右)

師、瀉山に盤桓すること前後十五載、凡そ語句有れば、学衆、弭伏せざるは無し。瀉山の密印を受くるに暨び、衆を領して王莽山に住するも、化縁、未だ契わず。遷りて仰山に止まるに、学徒、臻り萃る。

(37) 澄虚大師……Ⅱ『武溪集』巻七によれば、東平山に弘祖禅院の勅額を乾符二年(八七五)に賜った時のこととする。僖宗の即位の時、慧寂の六九歳の時に当る。

(38) 毎日上堂……『伝燈録』巻一には内容の発展がある。なお仰山齧鉄の話については、(14)の項を参照されたい。

師上堂示衆云、汝等諸人、各自迴光返顧。莫記吾言。汝無始劫来、背明投暗、妄想根深、卒難頓拔。所以仮設方便、奪汝龜識、如将黄葉止啼。有什麼是処。亦如人将百種貨物与金宝、作一鋪貨売、祇擬輕重来機。所以道、石頭是真金鋪、我遮裏是雜貨鋪。有人来覓鼠糞、我亦拈与他。来覓真金、我亦拈与他。時有僧問、鼠糞即不要、請和尚真金。師云、齧鉄擬開口、驢年亦不会。

僧無對。

師云、索喚則有交易、不索喚則無。

師上堂して衆に示して云く、「汝等諸人、各自に迴光返顧せよ。吾が言を記すること莫れ。汝は無始劫より来た、明に背きて暗に投じ、妄想の根深く、卒に頓に抜き難し。所以に仮に方便を設けて、汝が龜識を奪うこと黄葉を将ちて啼くを止めるが如し。什麼の是なる処か有らん。亦た人の百種の貨物を将ちて金宝と与に一鋪の貨と作して売るが如く、祇だ来機を輕重せんと擬するのみ。所以に道う、石頭は是れ真金

我若說禪宗、身邊要一人相伴亦無。豈況有五百七百衆邪。我若東說西說、則爭頭向前采拾、如將空拳誑小兒、都無実処。我今分明向汝說聖辺事、且莫將心湊泊。但向自己性海、如夷而修。不要三明六通。何以故。此是聖末辺事。如今且要識心達本。但得其本、不愁其末。他時後日、自具去在。若未得本、縱饒將情、学他亦不得。汝豈不見、滄山和尚云、凡聖情尽、体露真常、事理不二、即如如仏。

(四部叢刊本—四丁右左)

鋪、我が遮裏は是れ雜貨鋪、と。人有りて来りて鼠糞を覓めば、我れも亦た拈じて他を与えん。来りて真金を覓めば、我れも亦た拈じて他を与えん。時に僧有りて問う、「鼠糞は即ち要せず。請う和尚、真金を」。師云く、「鏃<sup>やじり</sup>を齧<sup>か</sup>んで口を開かんと擬すも、驢<sup>ろ</sup>年も亦た会せず」。入僧、対<sup>こた</sup>うる無し。師云く、「索<sup>もと</sup>めて喚べば則ち交易有るも、索めて喚ばざれば則ち無し。我れ若し禪宗を説かば、身邊に一人の相伴を要むれども亦た無し。豈に況んや五百七百の衆有るをや。我れ若し東說西說せば、則ち頭を争いて向前<sup>まえ</sup>に采拾すること、空拳を將ちて小兒を誑すが如く、都て実処無し。我れ今、分明に汝に向かつて聖辺の事を説く、且く心を將ちて湊泊すること莫れ。但だ自己の性海<sup>お</sup>に向いて如実にして修せよ。三明六通を要せざれ。何を以ての故に。此は是れ聖末辺の事なり。如今且く心を識りて本に達せんと要す。但だ其の本を得て、其の末を愁えざれ。他時後日、自ら具し去れり。若し未だ本を得ざれば、縱饒<sup>たと</sup>い情を將つてするも、他を学ぶも亦た得ず。汝、豈に見<sup>ま</sup>ずや、滄山和尚云く、『凡聖の情尽きれば、真常を体露し、理事不二なれば、即ち如如仏なり』。

(39) 所以に仮に方便……Ⅱ『大般涅槃經』卷二一嬰兒行品のたとえは、馬祖道一の説法にもみえる。入矢義高編『馬祖の語録』(禅文化研究所、昭和五九年一〇月)九二頁。

(40) 石頭は是れ真金鋪……Ⅱ『祖堂集』卷四によれば、道吾円智の語と伝える。注(18)の拙著一二三頁以下および注(22)の拙著一七一頁以下参照。

滄仰宗の盛衰(二)(石井)

(41) 問う、……『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章は、著語はないが、同じ問答を伝える。

僧問、法身還解説法也無。師曰、我説不得、別有一人説得。曰、説得底人、在什麼處。師推出枕头。瀉山聞云、寂子用劒刃上事。

(四部叢刊本一五丁右)

(42) 雪峰Ⅱ義存(八二二—九〇八)。泉州南安の曾氏に生まれる。徳山宣鑑の法嗣。福州侯官県永安郷嘉祥東里の雪峰山崇聖禪寺で活躍す。開平二年五月二日に示寂す。世寿八七、僧臘五九。黄滔撰「福州雪峰山故真覚大師碑銘」(『全唐文』卷八二六)に伝記がある。注

(18)の拙著参照。

(43) 福先Ⅱ省澄(八九二—九七二)。浄修禪師の号を賜わる。泉州仙遊県の阮氏に生まれる。保福從展の法嗣。泉州招慶院に住す。開宝五年閏二月二九日に示寂す。世寿八一、僧臘六一。注(18)の拙著六二頁以下。『紫雲開士伝』卷二に伝記があり、示寂の年月日と世寿が明記されているが、細部の行状は検討が必要である。

(44) 報恩Ⅱ行崇(生没年不明)。保福從展の法嗣。福建省漳州報恩院に住す。『伝燈録』卷二二に問答がある。

(45) 師は僧と……『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章に、同様の問答がある。

師共一僧語、傍有僧曰、語底是文殊、默底是維摩。師曰、不語不默底、莫是汝否。僧默之。師曰、何不現神通。僧曰、不辭現神通、只恐和尚收入教。師曰、鑒汝來處、未有教外底眼。(四部叢刊本一五丁左)

(46) 師は俗官に……『伝燈録』になし。

(47) 興化Ⅱ存奨(八三〇—八八八)。山東省闕里の孔氏に生まれる。臨済義玄の法嗣。河北省魏府興化寺に住す。文徳元年七月一二日に示寂す。世寿五九、僧臘四一。公乗億撰「魏州故禪大徳奨公塔碑」(『全唐文』卷八一三)に伝記があり、仰山慧寂に参じたことが知られる。

(48) 師は上座に……『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章に同様の問答がある。

師謂第一坐曰、不思善不思惡、正恁麼時作麼生。対曰、正恁麼時、是某甲放身命處。師曰、何不問老僧。対曰、正恁麼時、不見有和尚。師曰、扶吾教不起。(四部叢刊本一四丁左)

(49) 師は納衣を……『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章は、仰山の答えの一つがある。

師浣納次、耽源曰、正恁麼時、作麼生。師曰、正恁麼時、向—— 師は納を浣う次、耽源曰く、「正に恁麼の時作麼生」。師曰什麼処見。 (四部叢刊本一四丁右) く、「正に恁麼の時、什麼の処に向いて見るや」。

(50) 師、景岑上座……『伝燈録』卷一〇の長沙景岑章の問答は、「道」が「用」となって変化し、著語が加わる。

因庭前向日、仰山云、人人尽有遮箇事、只是用不得。師云、恰是請汝用。仰山云、作麼生用。師乃踢倒仰山。仰山云、直下似箇大虫。  
長慶云、前彼此作家、後彼此不作家。乃別云、邪法難扶。 自此諸方、謂為岑大虫。

(四部叢刊本一四丁左)

庭前にて日に向かうに因りて、仰山云く、「人人尽く遮箇の事有り。只だ是れ用い得ず」。師云く、「恰も是れ汝が用うるを請うがごとし」。仰山云く、「作麼生か用う」。師乃ち仰山を踢倒す。仰山云く、「直下に箇の大虫に似たり」。△長慶云く、「前の彼は此れ作家なるも、後の彼は此れ作家ならず」。乃ち別して云く、「邪法は扶け難し」▽。此れより諸方は謂いて岑大虫と為す。

(51) 景岑上座Ⅱ景岑(生没年不明)。南泉普願の法嗣。湖南省長沙鹿苑寺に住す。『祖堂集』卷一七に問答がある。

(52) 師、東平に……Ⅱこの問答と(73)の項の問答とは、もともと同じであったものと思われるが、東平山と観音院の異った場所として記録されているので別の記録としてここでは取り扱った。

(53) 師、韋宙……Ⅱ『伝燈録』にはこの問答はない。

(54) 相公、瀉山に……Ⅱ韋宙と仰山慧寂の最も有名な問答で、(2)の項の『宋高僧伝』卷一二にも既に見える。『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章は、『祖堂集』とはほぼ内容は一致する。

韋宙就瀉山、請一伽陀。瀉山曰、靚面相呈、猶是鈍漢。豈況形於紙筆。乃就師請。師於紙上画一円相。注云、思而知之、落第二頭、不思而知、落第三首。(四部叢刊本一三丁左)

(55) 問う、「響弓」……Ⅱこの問答は、既に(4)の項目にも見え、多くの著語が付された有名なものである。『伝燈録』では卷二七の「諸方雜拳徵拈代別語」にこの問答はあるが、著語はない。

僧問仰山、響弓滿月、響鏃意如何。仰山曰、響鏃。僧擬開口。仰山曰、開口、驢年也不会。僧無對。  
南泉代、側身而立。 (四部叢刊本一五丁左)

(56) 南泉Ⅱ普願(七四八—八三五)。河南省鄭州新鄭縣の王氏に生まれる。馬祖道一の法嗣。安徽省池州貴池縣の南泉山に住す。太和八年一二月二五日(新曆八三五年一月二七日)に示寂す。世寿八七、僧臘五八。『宋高僧伝』卷一一に伝記がある。なお、この南泉はあたかもその場に居あわせた様に解されるが、『伝燈録』のごとく代語と見るのが自然であろう。

(57) 強大師Ⅱ鼓山神晏の法嗣の鳳凰強(彊)と思われる。詳伝不明。泉州鳳凰山に住す。

瀉仰宗の盛衰(二)(石井)

(58) 国師二鼓山神晏をさす。神晏(八六三—九三九)。河南省大梁の李氏に生まれる。雪峰義存の法嗣。福州閩県鼓山湧泉院に住す。天福四年六月一日に示寂す。世寿七七、僧臘五八。『鼓山志』卷三、『古尊宿語要』卷二に伝記が存する。

(59) 浄修禪師二注(43)参照。

(60) 石門二『淳熙三山志』卷三三によれば、鼓山の浴鳳池の南に石研があつて門のように立っているので石門と呼ばれたとあり、鼓山のことをさす。注(58)参照。

(61) 双峰、瀉山を……二『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章と語句の違いもあり、著語があるので次に示しておきたい。

師問双峰、師弟、近日見処如何。対曰、抛某甲見処、実無一法可当情。師曰、汝解猶在境。双峰曰、某甲只如此、師兄如何。師曰、汝豈無能知無一法可当情者。瀉山聞云、寂子一句疑殺天下人。

玄覺云、金剛經道、実無一法、然燈仏与我受記。他道、実無一法可当情。為什麼道、解猶在境、且道、利害在什麼處。

(四部叢刊本—五丁右)

師、双峰に問う、「師弟、近日の見処如何」。對えて曰く、「某甲の見処に抛らば、実に一法の情に当たるべき無し」。師曰く、「汝が解は猶お境に在るがごとし」。双峰曰く、「某甲は只だ此の如し。師兄は如何」。師曰く、「汝、豈に能く一法の情に当たるべき無きことを知ること無からんや」。瀉山聞いて云く。「寂子の一句は、天下の人を疑殺せん」。△玄覺云く、『金剛經』に道う、『実に一法も無し、然燈仏、我が与に受記せり』と。他道う、実に一法の情に当たるべき無し、と。什麼と為てか道う、解は猶お境に在るがごとしと。且く道え、利害は什麼の処にか在る」▽。

双峰は、同門の福州双峰のこと。『伝燈録』卷一一の目錄に名のみ知られる。玄覺につては、注(128)参照。

(62) 順徳二道愆(八六八?—九三七)。順徳大師と号す。浙江省永嘉県の陳氏に生まれる。雪峰義存の法嗣。越州鏡清禪苑、杭州龍冊寺に住す。天福二年八月に示寂す。世寿七〇(七四とも)。

(63) 師、有る時……二『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章に同様の問答がある。

師閉目坐次、有僧潜来、身辺立。師開目、於地上作一円相、相中書水字、顧視其僧。僧無語。(四部叢刊本—五丁右)

(64) 問う、「如何なるか……二『伝燈録』卷一一の仰山慧寂章に同様の問答がある。

問、如何是祖師意。師以手於空作円相、相中書仏字。僧無語。(四部叢刊本—四丁左)

(65) 行者有りて……『伝燈録』卷二七の「諸方雜拳徴拈代別語」の所に同様の問答があり、仰山の代語がはっきりする。  
 有一行者随法師入仏殿。行者向仏而唾。法師曰、行者、少去就、何以唾仏。行者曰、将無仏処来、与某甲唾。無对。云、山  
仁者却不仁者、不仁者却仁者。仰山代法師云、但唾行者。又云、行者若有語、即向伊道、還我無行者处来。

(四部叢刊本—一五丁右)

一行者有りて法師に随いて仏殿に入る。行者、仏に向かいて唾す。法師曰く、「行者、去就を少く。何を以て仏に唾す」。行者曰く、「仏無き処を將ち来りて某甲の与に唾せよ」。対える無し。入瀉山云く、「仁者は却りて仁者ならず、仁者ならざれば却りて仁者なり」。仰山、法師に代わりて云く、「但だ行者に唾せよ」。又た云く、「行者、若し語有らば、即ち伊に向かつて道え、我れを行者無き処に還し来れ」▽。

「還……」の『祖堂集』の文は、「我れを仏無き処に還し来りて唾せよ」と「我れを行者無き処に還し来りて唾せよ」のように読んだ方が意味がわかりやすいか。

(66) 俗官有りて……『伝燈録』に、問答はない。

(67) 師、示衆して……右同。

(68) 因みに瀉山……右同。

(69) 師、瀉山に……右同。

(70) 洞山、人を……右同。洞山については、注(18)の拙著一四七頁以下参照。

(70) 師、沙弥為りし……注の番号が二重となっているので、後の方を(70)の(2)とする。この問答と類似するものが、『伝燈録』卷八の韶州乳源の章に存在する。

師見仰山作沙弥時念経、師咄云、遮沙弥念経、恰似哭声。仰山云、慧寂念経似哭、未審、和尚如何。師乃顧視而已。

(四部叢刊本—一二丁右)

師、仰山の沙弥と作りし時に念経するを見て、師、咄して云く、「遮の沙弥の念経は、恰も哭く声に似たり」。仰山云く、「慧寂わたくしの念経が哭する似たらば、未審し、和尚は如何」。師乃ち顧視するのみ。

注(31)の宗禅師について述べた様に推測することが一応妥当であらう。

(71) 問う、「今日……」『伝燈録』にこの問答はない。

瀉仰宗の盛衰(二)(石井)

(72) 瀧山、師を喚ぶ……『伝燈録』巻九の瀧山靈祐章にある問答は、『祖堂集』に比べて簡略である。

師謂仰山曰、寂子、速道、莫入陰界。仰山云、慧寂信亦不立。師云、子信了不立、不信不立。仰山云、只是慧寂、更信阿誰。師云、若恁麼、即是定性声聞。仰山云、慧寂仏亦不見。

(四部叢刊本—三丁左—四丁右)

師、仰山に謂いて曰く、「寂子、速かに道え。陰界に入ること莫れ。仰山云く、「慧寂は信も亦た立てず」。師云く、「子、信じ了わりて立てざるや、信ぜずして立てざるや」。仰山云く、「只だ是れ慧寂のみにして更に阿誰を信ずるや」。師云く、「若し恁麼ならば即ち是れ定性声聞なり」。仰山云く、「慧寂、仏も亦た見えず」。

(73) 師、沙弥為りし……『伝燈録』にこの問答はない。

(74) 第一、韋中承……以下(28)項までの韋宙、道存、思鄧、亭育と仰山慧寂の問答は、『祖堂集』に独自の記録と言つてよく、部分的に問答が『伝燈録』に存在する場合でも、明らかに原初形態を示している。恐らくは『祖堂集』の末尾に言う『仰山行録』なるものの主要な構成をなすものであり、当時成立する語録の濫觴とされる馬祖や百丈の「語本」と共に、語録の最古の形態の一つと云つてよいであろう。なお、韋宙との問答に展開される六祖伝は、仰山慧寂の場合、敦煌本『六祖壇經』ではなくて、『宝林伝』に基づくものであるという筆者の説と資料については、注(14)の二つの拙稿に述べたものである。特に慧能の偈が「本来無一物」となるのは、『宝林伝』の慧能章と考えてよいであろう。

(75) 衆僧は遂に……右と同じく六祖伝の一部であるが、慧明と慧能の機縁については、特に注(14)の前の拙稿の一一九頁以下に対照した注(21)を参照されたい。

(76) 第二、菴陵……項目(8)の注の(48)につづいて、『伝燈録』巻一一の仰山慧寂章に関連する問答がある。

師因帰瀧山省觀。祐問、子既称善知識、争弁得諸方来者、知有不知有、有師承無師承、是義学是玄学、子試説看。師曰、慧寂有驗处、但見諸方僧来、便豎起扠子、問伊諸方還説遮箇不説。又云、遮箇且置、諸方老宿意作麼生。祐歎曰、此是從上宗門中牙爪。

師、因みに瀧山に歸りて省觀す。祐問う、「子、既に善知識と称す。争か諸方の来者の、有を知るや、有を知らざるや、師承有るや、師承無きや、是れ義学なるや、是れ玄学なるやを弁得せん。子、試に説き看よ」。師曰く、「慧寂に驗处有り。但だ諸方の僧の来るを見れば、便ち扠子を豎起して伊に問

う、『諸方は還た遮箇を説くや、説かざるや』と。又た云く、『遮箇は且く置く、諸方の老宿の意は作麼生』と。祐歎じて曰く、「此は是れ従上の宗門中の牙爪なり」。

『伝燈録』では、仰山が瀉山に再び会ったのが、会昌の破仏後であるかが判らない。もともと、この『伝燈録』の問答では、道存の質問に答えた点も明確でないし、曹溪慧能の正系を強調していることも見逃すことのできない点であることも知られない。なお、道存、思鄴、亭育の詳伝は不明である。

(77) 瀉山又た云く……『伝燈録』卷一には、前注の(76)につづく問答として、次のようにある。

祐問、大地衆生、業識茫茫、無本可拠。子作麼生知他有之与無。師曰、慧寂有驗処。時有一僧従面前過。師召云、闍梨。其僧迴頭。師曰、和尚、遮箇便是業識茫茫、無本可拠。祐曰、此是師子一滴乳、迸散六斛驢乳。(四部叢刊本一四丁左)

(78) 瀉山又た仰山に……『伝燈録』にはない問答であり、その内容も瀉山門下の中で仰山慧寂を正系とする主張があつて注目される。

同学兄弟として、福州大安、鄂州全諒、志和、志遇、延慶法端の五人の名がみえる。大安は注(4)参照。全諒と志和は、『伝燈録』の目録に名のみ知られる。志遇は瀉山門下としては知られないが、あるいは斬州三角山法遇の名が目録で知られるので同一人かもしれない。延慶法端も詳伝はわからないが、襄州延慶山に住し、示寂後に紹真大師と諡されていて、『伝燈録』に問答が一つ記録されている。これらの五人が見解としては善知識と称することができても、行解が不十分であるとする評価も興味深いものがある。

(79) 仰山、瀉山に……『伝燈録』にはない問答である。般若多羅を二七祖とする説は、『宝林伝』の婆須蜜系の祖統説に初出するものであり、注目すべきだということは、注(14)の後の拙稿で述べておいたので参照されたい。また、六通の中に行通と理通を主張する点も独自の説として注目される。

(80) 仰山、瀉山に諮して……前号の論文の一四一頁下段八行目の仰山の所に番号を逸しているので加えたい。この段も『伝燈録』にはない。内容的には、『宝林伝』の六祖伝であり、これが椎名宏雄『『宝林伝』逸文の研究』(『駒沢大学仏教学部論集』第一号、昭和五年十一月)の論文において、『宝林伝』の逸文で確認された意義は大きい。注(14)の二つの拙稿参照。

(81) 仰山云く……『伝燈録』には、この問答はない。この項目の③の見解と行解を区別する主張を承けたものである。

(82) 仰山又た瀉山に……『伝燈録』にはない海印三昧の問答である。また、太和三年(八二九)に仰山が瀉山の印可を受けたことを記すのは、仰山の伝記を考える上で注目してよいであろう。この段は柳田聖山『続・純禪の時代』(『禅文化研究所』昭和六〇年四月)二

○二頁以下に取り上げられている。

また、問答中にある三生については、『人天眼目』巻四によれば、瀧仰宗の宗風を代表する瀧山の機関の想生・相生・流注生の「三種生」を指すものである。

師一日謂仰山曰、吾以鏡智為宗要、出三種生。所謂想生・相生・流注生。楞嚴經云、想生為塵、識情為垢。二俱遠離、即汝法眼底時清明。云何不成無上正覺。想生即能思之心雜亂、相生即所思之境歷然。微細流注、俱為塵垢。若能淨尽、方得自在。(以下略)

〔大正藏〕巻四八・三二一中

瀧山の主張の坐りに『首楞嚴經』巻四(『大正藏』巻一九・一二四中)があることは、瀧仰宗の性格を考える上で大事であろう。

(83) 仰山、瀧山に……『伝燈録』にこの問答はない。

(84) 道存に問うて曰く……右に同じ。

(85) 道存問うて云く……この段も、見解と行解の問答の展開である。大耳三蔵の他心通の話についての仰山の自受用三昧の説示が見られるが、この話から恐らく(75)の項目へ発展したと考えてよいであろう。

(86) 道存問うて云く……『伝燈録』にこの問答はない。三玄と言えば、臨済義玄の体中玄、句中玄、玄中玄が知られるが、仰山の場合を、この項目と(31)の項目を参照して図示すれば次のようになる。

見解||口密

行解||意密

初心入門||第一玄(心境俱除解)  
得座被衣||第二玄||種覺||三身如一||理無諍||遮那湛寂  
自看自知||第三玄||種智||身性円明||行無諍||舍那無依智

一体三身

師、一日、仰山に謂いて曰く、「吾れ鏡智を以て宗要と為し、三種生を出だす。所謂<sup>いわ</sup>る想生、相生、流注生なり。『楞嚴經』に云く、『想生を塵と為し、識情を垢と為す。二俱に遠離すれば、即ち汝が法眼、時に応じて清明なり。云何が無上正覺を成ぜざらん』と。想生すれば即ち能思の心、雜亂す。相生すれば即ち所思の境、歴然たり。微細の流注は俱に塵と垢と為るなり。若し能く淨尽すれば、方<sup>は</sup>めて自在を得ん」。

(87) 第三。苑陵……Ⅱ『伝燈録』にこの問答はない。達摩の四巻『楞伽經』の将来を否定する説。六祖伝に登場するこの神会説は、『曹

溪大師伝』に近いが、これも『宝林伝』に存在した可能性が大きい。注(14)の前の拙稿参照。宝志が梁の武帝に達摩を仏心印を伝える  
観音大士であると教える話は、『宝林伝』に初出するものである。関口真大『達磨』(岩波書店、昭和四二年八月)一一七頁以下参照。

(88) 道存、和尚に……Ⅱ『伝燈録』にはこの問答はない。達摩が梁の武帝に語る功德の説明は、『宝林伝』巻八にはない。敦煌本『壇經』  
にむしろ存在する。拙稿「恵昕本『六祖壇經』の研究(続)」(『駒沢大学仏教学部論集』第二二号、昭和五六年一〇月)八四頁。しか  
し、仰山が主張したい「淨智妙用」の説は、確実に『宝林伝』の逸文研究によって存在したとする波羅提と異見王の問答中に、「見性  
是仏」や「性在作用」の考えがあるので、『宝林伝』巻七にあった達摩伝にこの問答が存在したのではなからうか。六祖伝の薛簡と  
の問答については、注(14)の拙稿に述べる通りである。

(89) 道存問うて曰く……Ⅱ『伝燈録』にこの問答はない。馬大師語本の存在を伝えるのは貴重である。般若多羅の予言は現存の『宝林伝』  
巻八には存しない。ただ、『祖堂集』巻二の菩提達摩章(Ⅰ一六三)とほぼ同文である。

(90) 第四。幽州の……Ⅱ『伝燈録』巻二一の仰山慧寂章に、同様の問答を記載するも、思鄒の名は見出せない。

僧問、禪宗頓悟畢竟入門的意如何。師曰、此意極難。若是祖宗門下、上根上智、一聞千悟、得大総持。此根人難得、其有根微智劣。所  
以古德道、若不安禪靜慮、到遮裏総須茫然。(四部叢刊本一五丁左)  
なお、先(古)徳とは、『祖堂集』巻一四(Ⅳ一四五)によれば、大珠慧海である。

(91) 思鄒問うて……Ⅱ『伝燈録』には、前注につづいて、次の③の項目と共に問答を記載するが、省略が多いので比較しておきたい。  
僧曰、除此格外、還别有方便令学人得入也無。師曰、别有別  
無、令汝心不安。汝是什麼処人。曰、幽州人。師曰、汝還思  
彼処否。曰、常思。師曰、彼処楼台林苑人馬駢闐。汝返思  
底、還有許多般也無。僧曰、某甲到遮裏、一切不見有。師  
曰、汝解猶在境。信位即是、人位即不是。抛汝所解、只得一  
玄。得坐披衣、向後自看。其僧礼謝而去。

(同右)

僧曰く、「此の格を除いて外に、還た別に方便有りて学人  
をして得入せしむるや」。師曰く、「別に有り別に無しとは、  
汝の心をして不安ならしむなり。汝は是れ什処の処の人ぞ」。  
曰く、「幽州の人なり」。師曰く、「汝は還た彼処を思ふや」。  
曰く、「常に思う」。師曰く、「彼処の楼台・林苑・人馬、駢  
闐す。汝、思う底を返れば、還た許多般有りや」。僧曰く、  
「某甲、遮裏に到りて一切、有ることを見ず」。師曰く、「汝が  
解は猶お境に在るがごとし。信位は即ち是なるも、人位は即

ち足ならず。汝が解する所に抛らば、只だ一玄を得たるのみ。得坐披衣して、向後に自ら着よ」。其の僧、礼謝して去る。

(92) 思鄒問う……前注および注(14)の拙稿参照。

(93) 第五。海東の僧亭育……『伝燈録』にこの問答はない。禅決によって三昧に段階のあることを説いた独自の説であり、四種の無受三昧を法眼三昧↓仏眼三昧↓智眼三昧↓慧眼三昧(無無三昧・道眼三昧・淨明三昧)と浅深を説くものである。この説は仰山の禅風を考えていく上で大切であろう。また、二八祖菩提達摩から三三祖曹溪慧能の正系意識も強い。なお、集雲峰は仰山の一峰であり、後に紹介する張商英撰「仰山廟記」等に見える。

(94) 自余の法要……現存の『祖堂集』の説法が、『仰山行録』の分量のどれ程なのか興味のもたれるところであるが、今のところ確める資料はない。

(95) 後に仰山に帰える。仰山への帰葬については、仰山教団の発展と重要な関係にある。いずれ仰山門下の動向と共に検討したいが、仰山光涌が深く関係をもつものと思われる。項目(74)および拙稿「瀉仰宗と曹洞宗」(『宗学研究』第二九号、昭和六二年三月)参照。

(96) 伏牛和尚は……『伝燈録』巻七の伏牛自在章に問答があるが、仰山の著語はない。

(97) 伏牛和尚自在(七四一―八二二)。浙江省呉興の李氏に生まれる。馬祖道一の法嗣。洛陽の伏牛山に住す。長慶元年に示寂す。世寿八一。『宋高僧伝』巻二に伝記がある。

(98) 師。南陽慧忠。注(17)参照。

(99) 瀉山、仰山をして……『伝燈録』巻一の仰山慧寂章に次のような問答を残す。

又問石室、仏之与道相去幾何。石室云、道如展手、仏以握拳。乃辞石室。石室門送召云、子莫一向去、已後却来我边。  
却上(四部叢刊本一三丁右左) 雲居錫云、要会麼。如今歸堂去。明日

錫といひ、福建省泉州の人である。法眼文益の法嗣。江西省洪州雲居山真如院に住す。注(18)の拙著九六頁参照。

(100) 石室。善道(生没年不明)。長髯曠の法嗣。潭州石室に住す。『伝燈録』巻一四に問答がある。

(101) 師、仰山と……『伝燈録』巻一四の石室善道章に同様の問答がある。

師一夕与仰山翫月。仰山問曰、遮个月尖時、円相什麼処去。円時尖相又什麼処去。師曰、尖時円相隱、円時尖相在。雲巖云、尖時円相在、円時無尖相。道吾云、尖時亦不尖、不円。（四部叢刊本一一九丁右）

(102) 雲巖二曇晟（七八〇—八四一）。江西省鍾陵建昌の王氏に生まれる。薬山惟儼の法嗣。湖南省醴陵雲巖寺に住す。会昌元年一〇月二七日に示寂す。世寿六二。注(18)の拙著一三四頁以下参照。

(103) 道吾二円智（七六九—八三五）。江西省予章海昏の張氏に生まれる。薬山惟儼の法嗣。潭州道吾山に住す。太和九年九月一日に示寂す。世寿六七。『宋高僧伝』卷二に伝記があり、前注の拙著参照。

(104) 滌山、仰山に問う……『伝燈録』卷一六の雪峰義存章に同様の問答がある。

師一日謂慧稜曰、稜即長慶。吾見滌山問仰山、諸聖什麼処去。他道或在上、或在人間、汝道仰山意作麼生。稜曰、若問諸聖出沒処、恁麼道即不可。師曰、汝渾不肯。忽有人問、汝作麼生道。稜曰、但道錯。師曰、是汝不錯。稜曰、何異於錯。（四部叢刊本一六丁右左）

(105) 師二雪峰義存。注(42)参照。

(106) 長慶二慧稜（八五四—九三二）。杭州塩官の孫氏に生まれる。雪峰義存の法嗣。福州長慶院に住す。長興三年五月一七日に示寂す。世寿七九、僧臘六〇。『宋高僧伝』卷一三に伝記がある。注(18)の拙著五三頁以下参照。

(107) 師、仏殿に……『伝燈録』にこの問答はない。

(108) 玄砂二玄沙とも書く。師備（八三五—九〇八）。福州閩県安仁郷仁惠里の謝氏に生まれる。雪峰義存の法嗣。福州玄沙院に住す。開平二年一月二八日に示寂す。林微撰「唐福州安国禅院先開山宗一大師碑文并序」（『玄沙広録』付）に伝がある。注(23)の鈴木哲雄『唐五代禅宗史』九四頁以下参照。

(109) 利説き……『祖堂集』卷三の南陽慧忠章（I—一二三）によると、無情説法の経証となったもので、『華嚴経』としている。

(110) 報慈二光雲（生没年不明）。慧覺大師と号す。泉州蒲田県の出身である。長慶慧稜の法嗣。福州報慈院に住す。『祖堂集』卷一三に機縁の問答がある。

(111) 臥龍二慧球（生没年不明）。寂照禅師と号す。泉州蒲田県の出身である。玄沙師備の法嗣。福州臥龍山安国院に住す。『祖堂集』卷一二に機縁の問答がある。

(112) 滌山と仰山と……『伝燈録』にこの問答はない。

(113) 長慶二注(106)参照。

滌仰宗の盛衰（二）（石井）

(114) 順徳Ⅱ注(62)参照。

(115) 又た因みに……Ⅱ『伝燈録』卷一〇の問答については、注(50)参照。

(116) 仰山と岑大虫との話Ⅱ項目(10)参照。

(117) 師Ⅱ長慶慧稜。注(106)参照。

(118) 又た時に……Ⅱ『伝燈録』にこの問答はない。

(119) 禾山Ⅱ無殷(八八四—九六〇)。澄源禪師と号す。福州連江県の呉氏に生まれる。九峰道虔の法嗣。吉州禾山に住す。建隆元年二月五日に示寂す。世寿七七。徐鉉撰「洪州西山翠巖広化院故澄源禪師碑銘」(『徐公集』卷二七)に伝記がある。鈴木哲雄『唐五代の禪宗』(大東出版社、昭和五九年七月)一九三頁以下参照。

(120) 靈雲の桃花Ⅱ靈雲志勤は瀉山の法嗣で、悟道の機縁が、桃花を見たことによる。後に志勤については取り上げる。注(22)の拙著三四三頁以下参照。

(121) 仰山の天雲を見るⅡ仰山が慧寂をさすことになれば、悟道の機縁をさすことになろうが、どの話を意味するのか不明である。

(122) 帰宗の鼎を敲きて拳を竖て……Ⅱ『祖堂集』卷一五の帰宗智常章(Ⅳ—九三以下)参照。

(123) 問う、「仰山の歟……Ⅱ注(134)の著語中に同じ問答がある。また、『伝燈録』卷一七の禾山無殷章によれば、宋版では、さらに一問一答の語を加えている。

問、仰山插歟意作麼生。師曰、汝問我。曰、玄沙踏倒歟意作麼生。師曰、我問汝。問、未弁真宗、如何体悉。師曰、頭大尾尖。(四部叢刊本—二三丁右)

仰山の歟の話は、項目(51)参照。この話はよく取り上げられた様で、項目(51)の注(134)や項目(95)にもある。

(124) 師Ⅱ禾山。注(119)参照。

(125) 玄沙の歟を踢倒すⅡ項目(51)の注(134)の『伝燈録』卷一一の著語を参照。

(126) 師、仰山に……Ⅱ『伝燈録』卷九によれば、この項目の①は、東寺如会ではなくて、章敬懷暉の法嗣の東邑懷政の章にある。

朗州東邑懷政禪師。仰山来参。師問、汝何処人。仰山曰、広南人。師曰、我聞広南有鎮海明珠、是否。仰山曰、是。師曰、此珠何形状。仰山曰、白月即現。師曰、汝将得來否。仰山曰、将得來。師曰、何不呈似老僧看。仰山曰、昨到瀉山、亦就慧寂索此珠、直得無言可對、無理可宣。師曰、真師子兒、大師子吼。(四部叢刊本—一四丁左—一五丁右)

しかも、東邑懷政の問答はこれのみである。②については、『伝燈録』巻七の東寺如会章に同様の問答がある。

仰山来参。師云、已相見了、更不用上来。仰山云、恁麼相見、莫不当否。帰方丈、閉却門。仰山帰拳似瀉山。瀉山云、寂子是什麼心行。仰山云、若不恁麼、争識得他。(四部叢刊本一一二丁左)

東寺如会(七四四―八二三)は、韶州始興曲江県の出身である。大暦八年(七七三)に径山法欽に参ず。馬祖道一の法嗣。長沙東寺に住す。長慶三年に示寂す。世寿八〇。『宋高僧伝』巻一一に伝記がある。この項目は、『祖堂集』の方が正しく、伝燈録が混同したのであろう。仰山慧寂の参学上において、東寺如会の占める位置は大きいものがある。

(127) 師、有る時……『伝燈録』巻九の瀉山靈祐章に同様の問答がある。

一日師謂衆云、如許多人、只得大識、不得大用。仰山拳此語、問山下庵主云、和尚恁麼道、意旨何如。庵主云、更拳看。仰山擬再拳、被庵主踢倒。帰拳似師。師大笑。(四部叢刊本一三丁右左)

(128) 師、仰山と……前注と同じく『伝燈録』に見える。

普請摘茶。師謂仰山曰、終日摘茶、只聞子声、不見子形、請現本形相見。仰山撼茶樹。師云、子只得其用、不得其体。仰山云、未審和尚如何。師良久。仰山云、和尚只得其体、不得其用。師云、放子二十棒。玄覺云、且道、過在什麼處。(同―三丁左)

瀉仰父子による体用問答は、瀉仰宗の宗風を考える場合に後注(132)にもあるように重要と考える。なお、著語した玄覺とは、報慈行言(生没年不明)である。玄覺導師と号す。泉州晋江の出身である。法眼文益の法嗣。金陵報慈道場に住す。注(18)の拙著九六頁参照。

(129) 師、有る時……右の注と同様である。

師過浄瓶与仰山。仰山擬接。師却縮手云、是什麼。仰山云、和尚、還見个什麼。師云、若恁麼、何用更就吾覓。仰山云、雖然如此、仁義道中、与和尚提瓶挈水、亦是本分事。師乃過浄瓶与仰山。(同―四丁左)

(130) 又た問う……右と同様である。

仰山問、如何是西来意。師云、大好燈籠。仰山云、莫只遮个便是麼。師云、遮个是什麼。仰山云、大好燈籠。師云、果然不識。(同―三丁右)

(131) 師、仰山と……右と同様である。

師与仰山行次、指栢樹子問云、前面是什麼。仰山云、只遮个栢樹子。師却指背後田翁云、遮阿翁向後、亦有五百衆。(同―四丁左)

瀉仰宗の盛衰(二)(石井)

(132) 瀧山、物を提げて……同様の問答が同じく『伝燈録』巻九の瀧山章にあるが、情況が次のように変化している。

仰山、衣を踢ふむ次、提起おこして師に問うて云く、「正に恁麼の時、和尚作麼生」。師云く、「正に恁麼の時、我こが遮裏こに作麼生無し」。仰山云く、「和尚、身有るも用無し」。師、良久して却に拈起して問う、「汝、正に恁麼の時作麼生」。仰山云く、「正に恁麼の時、和尚、還た伊を見るや」。師云く、「汝、汝春間、有話未圓、今試道看。仰山云、正恁麼時、切忌勅塑。師云、停囚長智。」

(同四丁右)

(133) 仰山、瀧山に……『伝燈録』巻一一の仰山章に同様の問答がある。

師在瀧山牧牛時、第一坐曰、百億毛頭、百億師子現。師不答、帰侍立。第一坐上問訊。師拳前語問云、適来道、百億毛頭、百億師子現。豈不是上坐。曰、是。師曰、正当現時、毛前現、毛後現。上坐曰、現時不説前後。師乃出。祐曰、師子腰折也。(四部叢刊本一三丁左)

(134) 仰山、田中より帰る……よく話題となった公案で、『伝燈録』巻一一の仰山章には、異なる著語が加わる。

祐忽問師、什麼処去来。師曰、田中来。祐曰、田中多少人。師拈鋏而立。祐曰、今日南山大有人刈茅在。師拳鋏而去。沙玄云、我若見、即踢倒鋏子。僧問鏡清、仰山插鋏意旨如何。清云、狗銜敎書、諸侯避道。又問、南山刈茅意旨如何。清云、只如玄沙踢鋏意旨如何。清云、勿奈船何。打破厚斗。又問、南山刈茅意旨如何。清云、李靖三兄、久經行陣。雲居錫云、且道、鏡清下此一判、著不著。又僧問禾山云、仰山插鋏意旨如何。禾山云、汝問我。僧云、玄沙踢鋏意旨如何。禾山云、我問汝。

(四部叢刊本一三丁左)

仰山、衣を踢ふむ次、提起おこして師に問うて云く、「正に恁麼の時、和尚作麼生」。師云く、「正に恁麼の時、我こが遮裏こに作麼生無し」。仰山云く、「和尚、身有るも用無し」。師、良久して却に拈起して問う、「汝、正に恁麼の時作麼生」。仰山云く、「正に恁麼の時、和尚、還た伊を見るや」。師云く、「汝、用有るも身無し」。△此の語は是れ二月中の問答なり▽。師、忽ちに仰山に問う、「汝、春の間、話有るも未だ円まどかならず。今、試みに道いい看よ」。仰山云く、「正に恁麼の時、切に忌む、勅塑なることを」。師云く、「囚に停めて智を長ず」。

祐、忽ち師に問う、「什麼の処をか去来す」。師曰く、「田中より来る」。祐曰く、「田中、多少の人ぞ」。師、鋏を挿はさんで立つ。祐曰く、「今日、南山に大いに人の茅を刈る有る在り」。師、鋏を挙げて去る。△玄沙云く、「我、若し見ば、即ち鋏子を踢倒せん」。僧、鏡清に問う、「仰山の鋏を挿む意旨如何」。清云く、「狗が敎書を銜くわえれば、諸侯、道を避く」。又た問う、「只たとえ如ば玄沙の鋏を踢ふむ、其の意如何」。清云く、

「船を奈何ともする勿くして、辱斗を打破す」。又た問う、  
 「南山に茅を刈る意旨如何」。清云く、「李靖の三兄、久しく  
 行陣を経」。雲居錫云く、「且く道え、鏡清の此の一判を下す  
 は、著なるや、不著なるや」。又た僧、禾山に問うて云く、  
 「仰山の鋏を插む意旨如何」。禾山云く、「汝、我れに問う」。  
 僧云く、「玄沙の鋏を踢む意旨如何」。禾山云く、「我れ汝に  
 問う」▽。

玄沙は、注(108)および(125)参照。鏡清は順徳と同じ。注(62)参照。雲居錫は、注(99)参照。禾山は、注(119)および(123)参照。

(135) 順徳Ⅱ注(62)参照。

(136) 師、仰山に……Ⅱ『伝燈録』にこの問答はない。

(137) 石門Ⅱ鼓山神晏のこと。注(58)および(60)参照。

(138) 京中の大師……Ⅱ『伝燈録』にこの問答はない。

(139) 報慈Ⅱ注(110)参照。

(140) 師、仰山と……Ⅱ『伝燈録』卷一一の仰山章に同様の問答があるが、情況が変化して玄沙の著語が加わる。

滹山与師遊行次、烏銜一紅柿落前。祐将与師。師接得、以水  
 洗了、却与祐。祐曰、子什麼処得来。師曰、此是和尚道德所  
 感。祐曰、汝也不得空然。即分半与師。

玄沙云、大小滹山、被仰  
 山一坐、至今起不得。

(四部叢刊本一四丁右)

滹山と師と遊行する次、烏の一紅柿を銜みて前に落とす。  
 祐、将ちて師に与う。師、接得して水を以て洗了り、却に  
 祐に与う。祐曰く、「子、什麼の処より得来」。師曰く、  
 「此は是れ和尚の道德の感ずる所なり」。祐曰く、「汝も也た  
 空然たることを得ざれ」。即ち半を分かちて師に与う。玄  
 沙云く、「大小の滹山も仰山に一坐せられて、今に至りて起  
 ち得ず」▽。

(141) 師、仰山に……『伝燈録』卷九の虔州処徽章に同様の問答がある。

師問仰山、汝名什麼。対曰、慧寂。師曰、那个是慧、那个是寂。曰、只在目前。師曰、猶有前後在。寂曰、前後且置、和尚見什麼。師曰、喫茶去。(四部叢刊本一二丁左)

処徽(生没年不明)は、西堂智蔵の法嗣で、詳伝は不明。

(142) 有る人問う……『伝燈録』にはこの問答はない。

(143) 両口に……仰山の語と伝えるのは、この箇所のみであるが、仰山の宗旨を考える上で重要であろう。また、この説が新羅に伝えられている点も注目すべきである。聖住寺無染(八〇〇—八八八)は慶州の全氏に生まれる。麻谷法徹の法嗣。嵩巖山聖住寺に住す。文徳元年十一月二七日に示寂す。世寿八九、僧臘六五。崔致遠撰「藍浦聖住寺朗慧和尚白月葆光塔碑」(『朝鮮金石総覧』上)に伝記がある。

(144) 師、因みに……『伝燈録』卷一一の京兆米章は、仰山だけではなく、洞山も登場して新たな話の発展がみられる。

師令僧去、問仰山云、今時還返悟也無。仰山云、悟即不無、争奈落在第二頭。師深肯之。又令僧去、問洞山云、那箇究竟作麼生。洞山云、却須問他始得。師亦肯之、

(四部叢刊本一九丁右)

師、僧をして去か<sup>ゆ</sup>しめて仰山に問うて云く、「今時、還た悟を返るや」。仰山云く、「悟は即ち無きにあらず。第二頭に落在<sup>お</sup>つるを争<sup>いかん</sup>奈せん」。師、深く之を肯う。又た僧をして去か<sup>ゆ</sup>しめて洞山に問うて云く、「那箇の究竟は作麼生」。洞山云く、「却て須らく他に問うて始めて得<sup>よ</sup>し」。師亦た之を肯う。

米は、『伝燈録』によれば、米七師とも呼ばれ、瀧山靈祐の法嗣となるが、『祖堂集』は、瀧山の孫で、王敬初常侍の法嗣となっている。

(145) 尋いで江陵……以下、『祖堂集』にみられない問答で、『伝燈録』にのみあるものを取り上げる。仰山が受戒した場所が湖北省の江陵であることが知られる。僧臘は五四であるから太和三年(八二九)の仰山二三歳の時に当ろう。

(146) 巖頭<sup>ニ</sup>全豁(八二八—八八七)。泉州の柯氏に生まれる。徳山宣鑑の法嗣。鄂州巖頭院に住す。光啓三年四月八日に示寂す。世寿六〇。『宋高僧伝』卷二三に伝記がある。

(147) 一日……瀧仰の問答には、労働中のものが多い。この問答もその代表的なものである。

(148) 施主……施物を無駄にしないのは出家者のつとめである。項目(19)と共に、供養の受け方を論じたもの。

- (149) 瀧山の上坐……Ⅱ道理とは、上座の質問にだまされない仰山の自由なはたらきを示したものであろう。雲居錫は、注(99)参照。
- (150) 一日……Ⅱ『龐居士語錄』(入矢本―三二頁)に「見事な雪」の話があるが、ここでも雨そのものに語らせたところに共通の課題を読みとれる。

- (151) 鄭愚相公……Ⅱ『維摩經』の「弟子品」の語を話題にしたもので、「入」の一字のこだわりを徹底排除する。鄭愚は、広州番愚の人。『唐方鎮年表』巻七や『唐刺史考』巻二七五によれば、咸通二年(八六一)に桂管觀察使となり、翌年、嶺南西道節度使となり、翌年やめる。韋宙について、咸通九年に嶺南東道節度使となり、同一二年までつとめる。尚書左僕射を拝す。注(3)および(35)参照。また著語した法燈とは、清涼泰欽(?―九七四)のことで、河北省魏府の出身である。法眼文益の法嗣。金陵清涼大道場に住す。開宝七年六月二四日に示寂す。注(18)の拙著九六頁参照。

- (152) 師、僧に……Ⅱ幽州の僧思鄒との問答かもしれない。仰山が意気込んで質問したために、かえって僧から切りかえしを受けたものと言えよう。なかなかの僧である。

- (153) 師、僧の……Ⅱ仰山が禅の機関に墮すること恐れたことは、項目(1)の③に言うがごとくであるが、ここも喝の乱用をいましめたものと言えよう。

- (154) 瀧山、一面の鏡……Ⅱ南泉斬猫の話と類同す。果たして瀧山の与えた課題に、仰山が自ら陥ったと考えることもできよう。注(22)の拙著二六〇頁以下参照。

- (155) 師、一杖子……Ⅱ質問する僧の境への執着を奪ったものと言えよう。

- (156) 師、一僧に……Ⅱ易を自由に使いこなした問答である。雷天大莊とは、䷲の卦で、勢い壮んなさまをいい、地火明夷とは、䷣の卦で、勢いが急におとろえるさまを述べたものである。本田濟『易』(朝日新聞社、昭和四一年二月)二五六、二六九頁参照。

- (157) 師、僧に……Ⅱ名前を通して神通を問題にしたものであるが、神通はもはや不思議な力ではなく日常底に見出すべきものとの主張である。項目(81)参照。霊通について不明。

- (158) 僧問う……Ⅱ項目(21)を参照すれば、古人とは、瀧山をさす。

- (159) 僧問う……Ⅱ僧の問いが定型化しているために、僧を叱ったものであろう。

- (160) 問、「天堂……Ⅱ天堂と地獄が質問者にとって観念にすぎないので、それを打ち消したものであろう。

- (161) 師、観音……Ⅱ項目(11)および注(52)参照。巖頭全豁が仰山を高く評価している点は注目してよいであろう。

(162) 師、始め……『仰山の遺偈の記録は、『伝燈録』が初出である。

(163) 時に西天……以下『伝燈録』の仰山章以外の問答である。項目(29)の⑩および注(85)参照。

(164) 朗州中邑洪恩『洪恩(生没年不明)。馬祖道一の法嗣。現在知られる問答は、この項目(76)のみである。注(126)で東寺如会と朗州東邑懷政との混同の可能性を述べたが、あるいは中邑洪恩と東邑懷政の混同の可能性もある。その可能性を認めれば、項目(43)の①は、元来、中邑洪恩と仰山の問答であろうか。

(165) 仰山……『謝戒とは、受戒したことを、戒師に感謝することである。戒師とは、この場合、中邑洪恩をさす。『伝燈録』は、湖北省江陵での受戒を項目(58)で述べるので、その時、洪恩が戒師をつとめたものであろう。謝戒の方法は、独自の三昧で答えたもので、禅僧の面目があらわれている。

(166) 一宿覺『永嘉玄覺(六七五―七一三)。永嘉の戴氏に生まれる。曹溪慧能の法嗣。温州龍興寺に住す。先天二年一〇月一七日に示寂す。世寿三九。』『祖堂集』卷三に機縁の問答がある。玄覺の三昧については、同書(I―一四〇―一四一)参照。

(167) 師、仰山……『涅槃經』は、『曹溪大師伝』の坐りである。『涅槃經』の仏性説が、外道説と同様に理解されているとすれば、当然、全面否定しなければならない。一切衆生無仏性を説く瀧仰父子の説と共に注目すべき説である。

(168) 師、仰山に……『ここも日常生活の身近な話題を通して仏法を問いかけたものであり、瀧仰宗の特色を形成している。』

(169) 冬月……『仏法の直截性を問題にしたものと言えよう。』

(170) 石霜の会下……『禅を理解するのと体得するのは異なるものであることを示したものと見えよう。石霜とは、慶諸(八〇七―八八八)のことである。江西省廬陵新淦の陳氏に生まれる。道吾円智の法嗣。長沙の石霜山に住す。文徳元年二月二〇(二〇)日に示寂す。世寿八二、僧臘五九。』『宋高僧伝』卷一二に伝記がある。

(171) 師睡る……『驚子は、舍利弗で智慧第一の釈迦十大弟子の一人である。仰山と香嚴のはたらきが、後に神通第一の目蓮よりもすぐれたものと解釈されるようになるが、その解釈は、唐代瀧山門下の宗風を巧みにとらえていると思われる。注(22)の拙著の三二九頁以下参照。』

(172) 師、一僧に……『左右の二見に陥らないように牛の左右の角を通して語りかけたもの。五峰常観(生没年不明)は、百丈懷海の法嗣。筠州五峰に住す。』『伝燈録』卷九に問答がある。

(173) 師、沙弥……『『祖堂集』卷一六の石霜性空の章に次の問答を記す。』

師喚沙弥。拽出這個死屍着。(IV—一四〇)

『祖堂集』にもこのように、この問答は知られていたが、沙弥が仰山であるとは記されていない。石霜性空(生没年不明)は、百丈懷海の法嗣と伝える外には詳伝はわからない。耽源は、注(25)参照。

(174) 朗州古堤和尚Ⅱ古堤(生没年不明)について知られる問答は、この項目だけであり、章敬懷暉の法嗣と伝える。無仏性を主張していたことは注目すべきで、仰山の無仏性が、無碍三昧で表現されている所と共に、仰山の宗風を考える上で見逃せないものと言えよう。

(175) 仰山問う……Ⅱ靈鷲閑(生没年不明)は、南泉普願の法嗣であるということ以外は、詳伝は知られない。

(176) 湖南の上林戒靈禪師Ⅱ上林戒靈(生没年不明)は永泰靈湍の法嗣で、この項目の問答が知られるだけである。

(177) 永泰Ⅱ靈湍(瑞)(七五一—八二九)。湖南省衡陽の黄氏に生まれる。馬祖道一の法嗣。荊州永泰寺に住す。太和三年六月三(二三)日に示寂す。世寿六九(七五)。『祖堂集』卷一五に伝記があり、『宋高僧傳』卷一一の靈象と同一人であるが、年数等が一致しない。

(178) 黄蘗……Ⅱ一節に黄蘗と臨済の問題は触れた。黄蘗、諱は希運(大中中寂)。福州閩県の人。百丈懷海の法嗣。洪州黄蘗山に住す。

『宋高僧傳』卷二〇に伝記がある。臨済、諱は義玄(?—八六六)。山東省曹州南華の邢氏に生まれる。黄蘗希運の法嗣。河北省真定府臨済院に住す。咸通七年四月一〇日に示寂す。『宋高僧傳』卷一二に伝記がある。柳田聖山『臨済録』(前掲書)参照。以下同。

(179) 黄蘗……Ⅱ前注参照。

(180) 師、一日……Ⅱ右同。

(181) 師、黄蘗と……Ⅱ臨済栽松の話として知られる。

(182) 南塔和尚Ⅱ南塔光涌(八五〇—九三八)のこと。仰山の法嗣であるから、後に取り上げる。

(183) 鎮州三聖院慧然禪師Ⅱ慧然(生没年不明)。臨済義玄の法嗣。鎮州三聖院に住す。

(184) 仰山問う……Ⅱ項目(35)と元来は一つの問答であったと考えられる。嬰兒行が強調されている点は注目すべきである。六祖偈については、注(14)の二つの拙稿参照。

(185) 仰山、辞す……Ⅱ項目(35)の注(99)に示したように、『伝燈錄』卷一一の仰山章にも同様の問答がある。

(186) 鄂州巖頭全豁禪師Ⅱ全豁については、項目(58)および注(146)参照。ただ、巖頭が仰山に参じたのか、仰山が巖頭に参じたのか、二つの伝承となるに至っている。注(18)の拙者一八九頁以下参照。

(187) 清八路……Ⅱ清八路は伝不詳。仰山插鋏話については、項目(42)と(51)、およびそれらの注(123)~(125)、(134)参照。明招德謙(生没

瀉仰宗の盛衰(二)(石井)

瀧仰宗の盛衰(二)(石井)

一三八

年不明)。羅山道閑の法嗣。婺州明招山に住すること四〇年と伝えられる。『伝燈録』卷二三に多くの問答が残っている。

(つづく)

(一九八八・七・一七)

〔付記〕 注の文はすべて8ポイント活字を割り付けし、その予定でいたが、初校の段階で上下対照の原文と訓読文の引用文については、本

文と同じく9ポイント活字で組み上って来たので、ポイント数は訂正せずにそのままにしたことをここに付記する。

(一九八八・一〇・二)